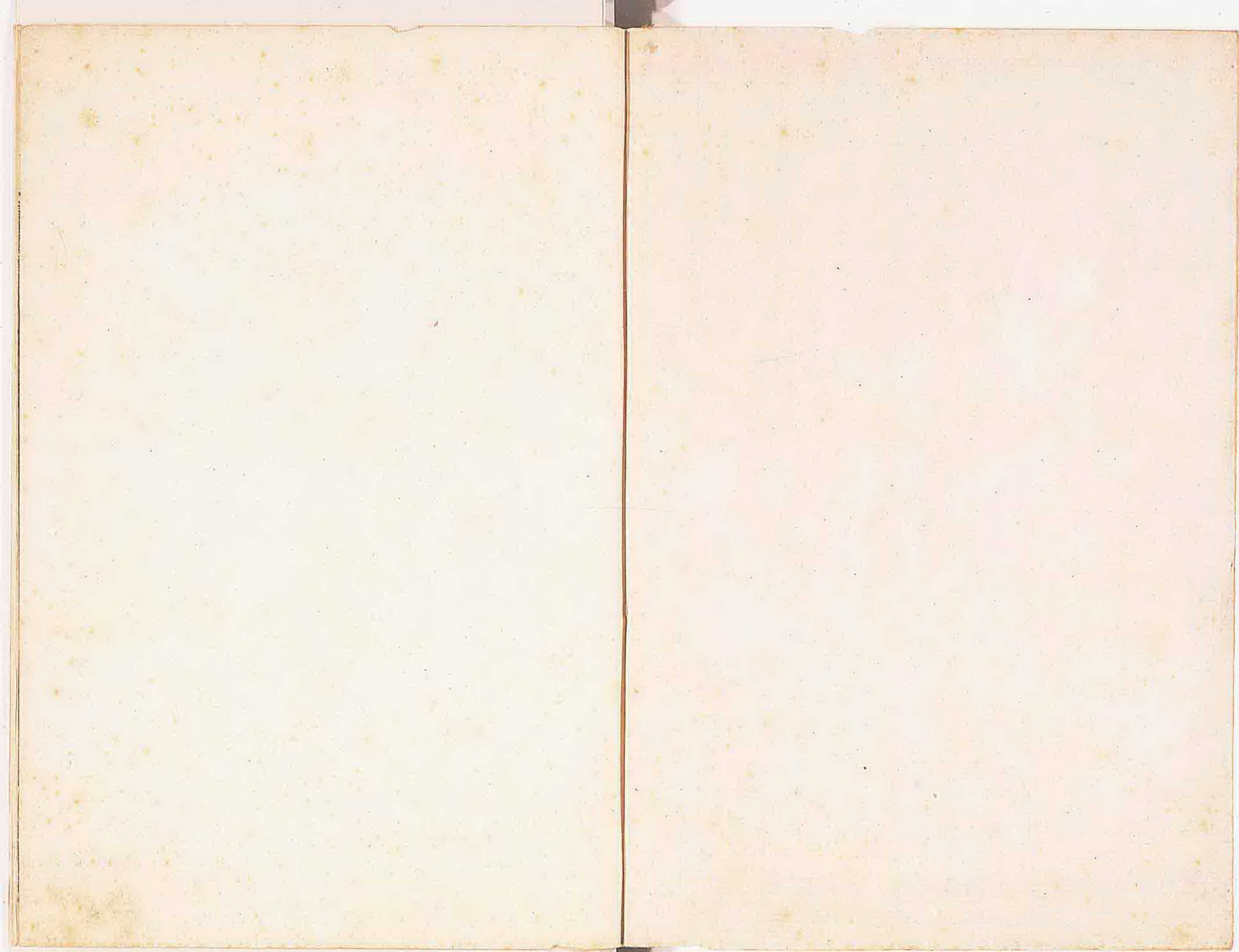


20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5



補 遺

恩 名 所 系 傳





序

恩之地汝野遼潤荒河繞於南刀水
橫於北窗常之雪映於簷波之霞沙
嶽之煙接於日光之雲靈山遙浮自天
涯近護駕城吾

公之移封於此也恩雨仁風徧被於庶
草貴護教而歸美焉同鼓樂以相賀
焉松村竹里日增人煙之稠桑畦稻疇

曾以此為廢之地戰國之時成回氏據
此以為北條氏扞蔽也兵火烘天馬廐
漲地伏尸積野暴骨不葬嗚呼何
其慘哉恭以

神君洪德一紓天下以為昇平擊壤之
世殆二百餘年矣今之人安其所安見
其所見遊蕩為俗淫逸是務示嘗知
寧歲倒懸之苦矣吾

公封內之地舊祠古剎絕勝名區竊在
少焉然而干戈爭鬪之餘其詳不可得而知
也

公之匡世作嶽嶠二子好事之士也休浚之日
帝奔走於東西闕曰祀徵以碑又卷之
於史乘搜索殆周而固之誌之數年之久
寢為卷冊繁然世不備具吾古成飲之北
公其壽之命也序其卷首美

公之喜之者非但喜鄉里之富田畝之夥猶地
之美也感昔时而省今日鑒既往以戒將來何
則至治之契必至於奢世謙者此哲之所然也故
能去其所以然以張之弛之不使至於敗壞
則永受其窮之福然則是書之益亦大矣哉
天保乙未初社中元後言

臣 芥川 通 謹 撰

洞李香沐り古きと云比まゝ人の傳りも誤りあるとて如き一思在
所因會と云一巻の何の故 君に授けたる所小思ふぬと云

おれたる事より其の事よりを惜しむおほに何よりおれは小補に書
面をり

作ふと云むむりぬおの程方拙く知ると云く時或
身のうらむわざのいふ傳といふ此もやうものなり 作ふとの可ふまは

はけふおもしろぬと云てあり日と云ふかきをを思ふりて我とおの
安寺の縁に社傳をりて何の因之に一漢より論するものと云い
ゆふに文よりふたしをくおれり思ふ考成を加入するなり作は
いそお巻と云増補思ふ所因會と題しとならふと云ふなり終
とも濃れたるも程よりぬおの程のちの物語く一日に難へん小
作より補せたるをを法よりおの小おの押するとの思ふ

中 所ある家廟のうへへて年甲うへに四の氏をさうに記たの
しむ何なりあるん

五保の六のうへに年月

長客うへに

九例

一 此書に記す洞孝香高の思ふ不図會小減たるは増えを補ふ
本書の一字を上に補修するに字をけし記を(増)加するは讀者
の見安き人あり

一 本書小諸寺院の記の比年承祚歌とふのを載たれども其用
なるを省て記さる

一 神祠佛寺等といふことも開基建祠の時代を古く載て集落
有る

一 祠系に記等ハ後世に記したるも有るは其の盡く記かくし

云へども古くは記さるも有る一 智を修し修して修するは

一 本出に載る因縁として記したるも其の多きを省く修するに

一 神祠佛を小左を記しハ本等の左を道路の左に記人の左に
記す

一 此の記す所の古書等記等ハ其の古きのは碑に修するは
同書小諸一 高虚室を修するに

下

溪間嶽

田

林

三

寺

日光

河

忍府

寺

東

山

南

卷之五

洞季香齋著
岩崎長谷增補

人皇十二代景行天皇四十年日本武尊東夷征伐歸陣の時秩父比叡
王武甕槌を薙ぎたまひ山神成りたまふ武甕槌を薙ぎ一國を以て
武甕槌國と号したり

增
曰事
訖胸刺
固是劍
之謂也
故見者
劍第
一故也
後名不

雅改改武蔵国云々

○埼玉郡

増 按る小和名抄云武蔵国埼玉郡延喜式神名帳

武蔵国埼玉郡生前生神社云此郡古くより埼玉といふ云萬葉集

小佐吉玉云前王云といふ和名集小異なり伊喜と相通延喜式

と云等なり——埼玉の字義異なり利未云武蔵国国分寺の中より

堀出野古瓦の中武蔵国郡此在城中央——物多あり其形字一たる書

の中



此尾極て古代多物し古より埼玉字を用ひしと見る志あり古くより

埼玉郡といふ俗説あり誤ある也——延慶の頃より天正の頃の文書に埼玉

西と云ふも又云たり埼玉と云ふは即ち西の東なるなり——葛飾郡在葛飾
今武蔵地を管する云東を葛東と云ふ小郡あり是ハ中より南なり

○

悉 又又増 此地名古く東鑑に建久元年二月七日將軍頼朝上洛に

家行行列云三十九番別府太郎奈良五郎四十番岡部六郎太瀧瀬三郎王

兼四郎悉三郎同五郎云々又建久三年の条に三月四日將軍頼朝御上洛全

九日名清水御参詣御隨兵云岡部六郎太瀧瀬三郎古郡次郎云々と見えたり

別府五井等いつても多し近き地名なり考ふる小悉三郎駕三郎字異云

已ども訓おろしや其間人なり事云々思ふに地名ゆゑなりと云ふ事

亦是より一里ぬき別府五井奈良成田を加へて武蔵国成田の家

いへる説あり下条ふ出は依る此地は思はれりと云ふを傳ふ或説に成

田氏長の室の秋と云思はれ思ひありふりて多きなりなり

あまの松々下を足門の内加藤氏門前の垂木として
いふ又浪虎組屋敷前の松として説く所も少詳

又沢庵組屋敷前の松を不説の寺より詳

里山起鏡

星の心佐下

あふもむのな

荒川向
てふ

北勢八郎永

井庄と号する

墨以印方小

藤實盛の住

人皆知之

智學志

の
花
々
々
々

智古神

廿三

今更々妖多

羽生ハ井江

其領の稱のハ

御城

御城

總守親齋

吉公少降与

輕臣一是

城同十六年阿

君使唐城と

常盤

源よりして大湖より一々前項録せたる水上の諸島雁
翔一金鯉銀鯉浮遊して樂あり是皆國家の瑞祥なりて古の靈
沼靈臺と云ふなり

成田記曰大職冠鎌足十二代の後胤緩小路右近少將義孝朝臣之嫡權大紋
言行成の子に二男忠基武家となり武藏よりして幡羅郡に位する男幡
羅太郎といふ男ありて成田の地を稱し地名成田苗字と成田を
といふ後式部大輔小任は伊豫守頼義の叔父に其男太郎助廣といふ男別
角二郎行隆三男奈良三郎高長四男玉井四郎助實と云各近江小倉右に
御ふ世替り小随て各年首の勢ひをあり是を武藏國成田の四家と稱す
應永の末より文明の初より成田の武威盛なり三家は幕下に属し終
に陛下の例もとれ此助廣より五代に嫡男土郎家時文武兼備せりは成

田家倍繁榮し應永七年三月七日卒嫡男八世にして二男土郎左衛門尉
資負家を継ぐ生隋弱きして淫酒に耽り永享二年九月十一日三十二歳
小して卒其嫡男大九郎頭泰八歳にして家督を継ぐ臣補佐して立之同
一年足利持氏上杉憲實矛盾小違ふ此時頭泰七歳なりしが上杉より
軍功あり持氏憲實に和せしむ尚維染せしめて鎌倉永安寺にて持氏生害
有り翌年頭泰去年上杉家に討て援軍の軍忠なりとて管領上杉清方に
吹舉依て下總守に受領し後尚數度軍忠なり文明十二年家を嫡子太
郎次郎親泰小譲りて其母の隠士となり剃髪して清丘入道と云親泰成長
するに録倉に有るなり應仁十八年上杉定正功臣太田道灌を謀代之刺頭
定正も態し定正小倉より親泰も軍小随ふ此年親泰下總守に任じ
爰小倉より思ふに地理ありて是年連年望望に思ふ大坂に太田道灌

と縁者なりふりて黙止して有る久道灌滅亡して定正微勢となり
延徳元年西家既確執ふ及び此の親泰時来りぬと歡ひ顯定は訴へ一時
責められ大西方尽て館ふなりけ一族ふとくふなりぬ延徳二年
より城の経営を取り翌年成就して爰に移り大永二年の夏親
泰は嫡男太郎土郎長泰の家を譲り法伴して宗康庵と稱し幡羅郡奈
良の里小隱館を建て轉居畧長泰は享祿年中中務少輔に任官其嫡
左馬介氏長共小北条家に属して教度軍忠有り仁子連なり武蔵の旧家と
稱して北条も是を會統する事親属の如きと按ず小成田家は足利左馬
頭基氏より代々菅領家の幕下あり上杉憲政越後より赴きて後小北条氏康
に属せり石原村民家に傳へ成田家傳と云ふ書有り証しあるは是なりと云
へとも據有る書ものなりと暫爰ふして考のたつこと成田記

と合さるなり

成田家傳

武蔵国小豆ヶ藪河丹ヶ藪といふ宣化天皇の末孫丹治の姓より青木勅使河原
安保は横山黨猪股黨に敏達天皇は赤葉小野姓より萩野岡部横山是也
見玉黨は藤原姓より本庄倉賀野是なり私黨は私市姓川原久下是に
其外は大概亡びて今又一家といふなり其外は思の成田是に先祖大脚
冠三代の後胤綾小路右近衛少將義孝子二人あり一男は入納言行成今世尊寺
の祖也次男は武蔵守忠基あり忠基より五代の孫を武部大輔助高といふ武
蔵國司と成て幡羅郡に住る時人幡羅の大座といふ此助高伊豫入道成之叔
父也然るは頼義奥州貞任宗任追討の大將軍として下向なり武蔵を通り
時此郡へ馬を寄る諸士悉く出仕る此時助高は大将頼義へ参りて出馬

頼義も助高の誼（参らま）り途中して河邊の助高下りて禮に頼
義も下馬して禮せり助高は頼義の叔父なり故に双方互に下馬の禮あり
成田家々ふ至て大將對面の時互に下馬して禮を此家の作法なり此助高
小子四人あり一男は成田五郎二男は別府三男は奈良四男は玉井とありあり
別府を左馬門尉行隆と云行隆小子二人あり兄は左馬門佐行助弟は治部輔
義行あり兄弟二人を別府と云義行の子は別府太郎義重其子行重壽
永之以源義経は隨ひて谷の先登一鎌倉殿より勲功の賞ふれり此家別
て繁昌は是より北南といふ苗字の侍多れり北河原如此根本一なり
嫡子庶子歴然として分明なりとも未に至りては成田と玉井も奈良も別府
も皆午角の家より繁昌も家の下知なりとあり文明年中と成田酒卷
兩別府久下奈良玉井須賀忍北南と云地侍何處も午角の侍といふ方管

領の下知は隨ひて其後因事大に乱れり成田下總守入道宗蓮忍は移り
ハ近隣の諸人饑饉より夫よりして忍の城を築きりて北城河の中なりハ
造作をありてありしハ近隣の諸將へ毎年人夫を雇ひ多量なり
此城は要害を有するなりハ初は頼義より後ハ新領に
數年ありとありといふ自然ハ宗蓮へ役を與へりてハ忍の城なり
彼下知は隨ひて宗蓮一代の中近隣の諸將を下知し其子下總守長泰の
時分ハ地侍千騎の大將とありりハ只威のばを有しハ忍の城なり

小田原宗氏綱の批判有りとあり

増御城の地形屋鋪等の古板を考ふるハ今の所ハ九三の丸より東ハ沼場を限り
南ハ下忍御門河よりを限り西ハ町外矢場邊を限り北ハ城なりとあり
谷々村旧地ハ田地のちなりハのちハ城地なりハ今の内行田ハ谷等と云

又今の成行田の久伊豆明神ハ行田町の鎮守し是ハ古き社にて此辺町まで
有しと見る社の東へ向ふ所にて考ふる所なりハ本町田の迫るに有り
うと思ふ都て鎮守或ハ防の神とて町のせまり或ハうへへの隅小なるも
あり有れども成田記ハ大手口血尾外張持田口外張ふと書きしと今の様
といふなりへるありて考ふる所なりハ血尾村より外張といふ所あり此杯
可なり所なり

○増 諏訪大明神 市本丸側廓小鎮坐あり 諏訪助輪とて神祠有故 御当城の鎮守あり 神祠四座 中大諏訪 大明神

左 稲荷大明神 八幡大神 右 天照自美神宮 当社宝物塗重藤の弓 矢般莖矢内紋時繪有り
各忠吉朝臣より奉納しと云 祭神徳御名戸尊 神主 高木長門
当社歛請の年月詳ふなり社家の説ハ 御城築より多く有しとふ又
俗説ふむのハ持田村小有りた爰小近江 御城地持田の地なり故せと云

今河村小字沼尻といふ所ハ諏訪の旧地なり 同南条と云所ハ神保田畑なり

○地獄橋 北谷より帶曲輪ハ掛り橋なり此橋ハ浅間赤城山等の寒風

吹付りて殊の外寒し甚しき時ハあつて落しとも有り依て此名なりといふ
俗説信用ありふとふ

○縁切橋 上荒井より内矢場から橋なり此橋ハ成田氏長小田原出陣の

時内室家臣等小別を惜しむ所也と云今世嫁し行者此橋を渡る事
を忌む所名の如しといふ

○増 成田記ハ此類ありと畧に曰書ハ退城の時諸士女等を代拜し君臣三

世の縁ハ是限りありと落涙せし所ともいふ

○鉦打橋 沼尻より袋町へ掛る橋を云所謂むす

○増 按るハ鉦打橋ハ下忍所門外張り百石町へから橋をいふなり今水野某

屋舖山田某下屋舖の辺昔鉦打聖と云る者住れ故俗小呼習ひ物不
多々一固小鉦打聖といふもの一遍上人諸国遊行の時帰依の僧
侶数多有り中少も薪水の役をせし者有ハ何阿弥と云をれといふ
後或法術一又俗呼して阿弥と号し念佛行者とありて鉦を打て
諸国を修行を俗呼て鉦打聖といへり今も在り処と小なり則此所不
住一鉦打も後に増五村小住居らるなり

○秀衡駒鞍松

江戸町島山某庭中小なり 往古秀衡此処を通り
一時駒を繫ぎて休一処しと云り由縁詳なり

○増 按る小大木なるも星霜五六百年の物と見え以後世植續しとのり

ふり

○浅田宮

同所伴某の庭中小なり 忠吉朝臣歎請しと云

○増 多度両宮

帶曲輪小鎮座文政九戌年

君候勢州桑名多度山より迂一なり

○増 東照大権現御宮

下荒井小御鎮座文政八酉年

御造営 御別当

摩振山

金剛寺

○御城下

町割有始
詳なり

○増 いふく今この町のことと云り氏所新町

下町寺町割あり一と云

○行田

町の惣名なり異に業思作の
今寺の行の字を用ゆ

上中下町新町大町等の町名あり

○本町

○増 古園小行田本宿と云 今の新町小行田横町筋と云

此地ハ日光海道の駅小して江戸より路程十五里北新郷宿ニ里鑑林一
里西熊谷ニ里あり諸国一のたうと市店小諸国の産物多野一毎
月一六の日市を立て諸色を交易此市のを免ハ天文十三年辰正月

六日所りと云

南之方

○平田山清善寺

洞家成田龍淵寺末寺領三十石

惣門横額

指月印書

茶師堂門の向ふ 円通大師堂

石碑

唐画の円通大師の像を利重の銘に北山也

石橋

門前小橋青石一枚石あり巾一間半堅二間余茶尾村真歡寺岩窟の扉ありといふ

○増 当山は成田五郎家時長子五郎左門尉資負の二男成田形部少輔顯忠永

享十二庚申年草創龍淵寺五世の僧を招いて爰に居りむ其後松平薩广

守忠吉朝臣諸堂塔御再建可なり也

○天満宮

佐間村合ふ所 神休春日の佐古木の梅 社内此梅大木ふし凡二圍

より高き漸き間斗いの所や雷火の爲に悉く焼てその國のものといふなり
よそ中へうつりあり近年氏中より若木生出て繁茂一八重の白梅咲けり

いつの頃より神木と移来り別当

慈眼山

安養院 下忍通照院

○天真山高源寺

洞家清善寺末

○正木丹波守利英之墓

日寺門内照ふなり

天正十九年天三月初二日

碑面

當寺開基傑宗道英居士

成田下總守殿御家臣正木丹波守利英

○増 正木丹波守利英は成田家の老臣に天正の畿城小佐間口の大将なり大手口

難儀の節行田口より町に入て寄手の石を切取陣中へ返忠の有様なり

云々して大手口の諸將方を竭て其小敵を退退けし利英の軍謀

是に依て大手口の諸將方を竭て其小敵を退退けし利英の軍謀

ともふし其外所の軍忠有り爰に省く

○沼尻

○増 沼のありへあるありあり行田より松山への往還に今歩卒居あり

此河より望む小沼波蒼蒼として大湖小等しく松林繁茂て
大山の如く柳御当城いつかり望むと云へとも見るあり只此沼尻の
女牆粉壁樓櫓の瓦をみるのみ天文の以上松謙信当城を攻めざるれ一時
此河より望む城中の形勢を巡るれりや成田氏天文廿二年壬子
三月下旬より西上州小馬を出し北越の軍勢城外に詰寄る
城の要害無双なり一方深泥みみち容易に攻進く事能はれ
是ふもの大將謙信自ら大物として佐間下忍の方へ乗廻り城中
の形勢を巡るれり城兵大將と見ゆ幸に打面とも鉄炮の手に
十人一度おぼしき謙信の身ありに其時謙信馬の鼻を城
の方へ向け扇を用ひありく白眼て静しと退りて城中
にも其勇威を感賞しなり時小天暗く俄小雷鳴りて風雨烈く

十日軍あり翌日足輕を進て追合なり双方手負死人多く雄雄未
半のとき小戸君の大石源左門尉入道より羽檄を飛ばし條氏康豆相の
軍を率い小田原を脱出し忍の後援と無同く又東上野厩橋へ出張
とも聞かざる実否いまだ不定なりといへとも註進仕りも有るれは謙信如
何思ひけん翌日田を解平井の城へ引取るると云ふ

○富士浅間大明神

崎玉郡入口右手山上あり女人禁制の礼建延喜

式内の社あり神体鰯魚に乗ありと云当村の出生神し氏子の者不限る当
村に住者鰯を食ふ事を禁むる儀ありて人食ふ必出たりといふ例

癸六月十三日三月今神樂修行中

○国王山行寺地藏院

天台宗東都上野末九墓山麓あり

水尊地藏菩薩

長二尺斗忠泰
和尚作

増夫当山の開基ハ人王三用明天皇の御子聖徳太子の舍人調子麻呂也
推古天皇の御宇太子甲斐の驃駒小果て駿州富士の嶽小騰る舍人調
子麻呂唯一人日之小随ふ太子山頂に於て四方を遙く臨み觀し曰是が
東小当て此雲巖巖なる處なり今推量る小武蔵国埼玉郡なり
彼所ハ必佛法東街の霊場なり吾明年死ん汝調子磨吾の廟を此所
小建朕常々尊崇する地此菩薩を安置せよとのたまふ此地龍南
嶽の思太和尚浮屠氏と號し聖徳太子此和尚の化身と云いの作し此時の彼太子の像今寺小存也
焉 推古帝元年二月己丑朔日夜太子班鳩の宮小薨一給小玉臣百
姓の愁歎いふ斗ふ一此月河内磯長陵小葬る帝遺言に任て調子
磨御遺骨を首小掛て武州小下句一埼玉の郡小あり何所を所墳
墓小定んと彼方此方々尋求小心の苗る小あり一今この磨墓の地

小亭て御遺骨磐石のふとを重くかりてあつた調子磨墓を太
子の御心小叶聖徳太子と則御遺骨を納め堂を建て伴の地蔵尊を
安置一又二字を建立して國王山地蔵院と号す人王三十六代皇極天
皇二年十月蘇我入麻呂大臣兵を率いて聖徳太子の御子山背大兄王の
住小班鳩の宮を圍て攻戦ふ大兄王討給ひ敵の骨を以て寢所小
指置子弟三人を將て竊小騰駒山小隱れなす小兵とも火を放て宮
中を燒炭の中小骨を見て王の焼死たなりと圍を解て去り以其後子
弟二十三人班鳩寺の塔中入て誓て悉く経死に香煙氣を焚いて天
雲小通一男則天仙と号し女則天女とあり煙雲小駕一西をさして
死去る小調子磨又大兄王の御遺骨を取て武州小下句太子の御墓所
小納め伴の寺を西行寺と号し是大兄王西をさして死すなり

故不考之。又彼墓を磨墓といふをハ調使磨の建立せし故なり
人王三十七代孝徳天皇の沛宇天王寺に於て靈鷲山上宮太子の像を作りし
此序小上宮太子の廟所武州埼玉郡西行寺へ寺領五十余町を寄附給ふ
是太子菩薩の爲具國家御安への事——巨勢磨帝の仰ふ依て寄進
状に載らる也 皇極天皇二年西行寺と号し之に此寺終小断絶す
然るも永録天正の兵火に延焼燼とあり氏后山の麓に小堂一宇を營し
彼太子地藏の二像を安置せし今の西行寺是也

○丸梅

西行寺の東田圃にあり方四五間繁茂の白樹也

太子の舍人調子磨當寺を草創して庭前小植し之に丸磨の像か

○磨墓山

小山に嶺に地藏堂あり麓より四五十間双皇天正年中忍城

水攻の時石田三成此山に陣をかりて城中に石火矢を打入ると云規に城中さぐ

うに見へて誤て下忍遍照院に打込なりと云ふ此山より城中まで路程九町も
あり——山上より行田を望む風景あり——

○増 永録に本年上杉輝布入道謙信が城を攻むの時此山に参りて城中

を觀察す——と云ふ 成田記に
見ゆ

○増 海東山天祥寺

齋家崎玉村の入口にあり 彦家御代への御菩提

所し天保七年

君族より御造営あり 爰に諸堂塔壯麗に

して異香氣を——清淨寂寥なる靈場なり

○可見才藏の墓

天祥寺門前松林の中より一可見氏に福島家功臣武

勇への知事爰に後阿部侯小事之子孫にあり此森の竹木少くしても
取れぬ崇ありと云傳ふ

○増 埼玉山盛徳寺

日村の東にあり新義真言長野村長久寺主

当寺ハ平相国清盛公の建立なりと云々又云重盛公と由縁詳なり
といへとも古刹と見えし今も中よりさあぐのり、附たる瓦爰彼
所より掘出せり此瓦至て古代の物と見え時代其中大同元年の
未考文字ある瓦一枚掘出せし事ありしと云清盛公の建立といふも
再建日やむづむ相考ふ



○小崎沼 村のちつ沢田南の中よりいさゝかなる池あり側小松一株を植

碑を建古た名所なり事ハ人能知る要なり然る小漸星霜累りて既

莠蔚のうちふうくき失をんせしを先城主ぬのき是を惜して永代

不朽の爲として碑文を建置せし也

増 碑の名

正 武蔵小崎沼 篆字にて書

古所名称武蔵小崎沼即是也所考證

以方葉和歌集矣自寛平五年 癸丑歲

右至爲八百六十九年 蓋可知其古、矢此

地紛紜莠蔚中而既爲隱其所天豈可

不惜耶於是勒其地名於石以爲不絶

不朽云

見武蔵小埜沼鴨作歌

前玉之小埜乃沼鴨曾翼霧已尾雨
零置流霜乎掃等有新

武蔵国歌

佐吉多満能津雨乎流布補乃可是乎

後伊多美都奈波多由登毛許登奈多延

曾根

右萬葉和歌集之歌二首

宝曆三年癸酉歲九月望

左 武忍城主玉褐阿部正因建

臣 文国平岩知雄書

増 ささ暮る湯清しきる所玉の波ふかりぬ海も波清く 定家

増 ささ玉のなまきりの池ふ咲花にあやめふまきと杜若あり 清人 未考

増 比村及び若小玉村下長野村よりくく小き山形のもの凡そ本々所は有

ふと小当村小有物ハ大なる多し 里佐志れを自塚といふ按る小

比塚ハ皆自然のものと見えん築きあせる物ありん歟試み踏むら

し見るに音ありてうはらありもの如し今其地を掘崩たるを見る

にいばまも大岩あり置たるものあり 土人等云此中より鉄物又

環杯の類有しと云ふ小見村觀音山より堀出せし物を見たる唐銅

少く作りたる飯櫃とも見えん丸なるより底のうへに余程朽てあり

蓋も有り極て古風なり物なり考ふに往古貴人杯を築りて墳ふ

なすんをきく考ふる小此阿くりのい小限る幸なり山形の有る依
て産を掘設—なるう志く

増 当地名産と稱る辛味菜菔此村より作る他は移し極て必形状
風味も尋常の物となりといふ是風土のあらうあむる也歟幸毎小
君侯なり

宜へ歟—鈴小是し風味他小要なり形蕪菁小似て大なる目し一尺余
し有り美なり其味苦—生じてなり—用ゆれば殊小上品なる物なり
惣—て此村ハ畑よりて四時作り出され野菜皆行田の市小ひさく
小と小菜菔落他小勝じて風味佳なり

辛味菜菔



增若王山

若王山 村の東倚田甫の中より此山より岩窟有り近此山に
崖崩きし時中より太刀之金物或ハ金の輪杯出し事有り太刀一
握のすゝて有り一々悉く朽果て金物の多く残れりなりと云此山より
衆族の布帛硝蔵建

增櫻木坊

櫻木坊
屈巢村左手小所、本尊茶師長を尺をのり行基菩薩
の作り別当 医王山田光院

京都聖護院御末寺建長六年相州鎌倉平元帥北條相摸守時頼
朝臣之建立也開山廣安寺廣林僧都なり 永仁六年戊二月一日近寂
之中與開基廣安寺土代の孫日光院宥賢法衣之文惠二年寺焼失
同三年再建 日光院と号け天文廿一年子六月迄代々天正十九卯年
十一月

神君当地御放鷹の時御鷹控られたりし小境内の榎木に當り居たりや
此の時市恩茶よりて垂くも寺領御年不花榎本坊と号を下し
賜りしと元和年中御朱印焼失に櫻の本は今に庭中みゆ

靈寶

茶師如來運慶の作不動明王

弘法大師の作
立像一尺七寸

昆沙門天

護法親王
少筆

觀音堂

日村の左ふあ

本尊馬頭觀音

長一尺二寸
作不知

別當大悲山

觀音寺此尊像の由縁は加藤肥後守清正朝鮮陣中まゝ或一秘藏の馬
 づゝゝ錦林の城主福島左衛門大正則方へ寄り給ふ歸り小馬此所にて悩んで
 若干此金銀等を里正小忠にいたはり遺はさすを頼し下人共ども
 残し附置られし小彼里正極て貪欲ある者にて彼下人共どもかき免て
 其小馬を打殺し多くの金銀等を配分せり然るに小此夜里正を乞ふ

一類眷屬小多きと悉く狂乱を依て馬頭觀世音を安置しあめく
祈念せし小後快氣なりと云々

○此村名の義はむろろ大なる就寫大木へ巢をあり近郷の子供を取喰ふ爰
小同村様を坊普濟寺西僧立合祈するの然る何處へ逃去しあり
夫より村の名を呼と云ふ

聖天宮野村の中程右手にあり別当胎智山満願寺長野長久寺末

本尊不動明王長作あり

○増堂前小大木の簾様あり垂絲長くして花の以て遊艶なり

○堤根松原 堤根村より小あり鴻巣への往還あり俗に古本松と云ふ

○増八幡宮渡柳村東裏畑の中より土人云郡鎮守として元々年小も
ありぬ古社ありと傳ふ小神祠二社あり一社は若宮八幡宮一社は稻荷

ありと云延喜の神名帳に載る埼玉の神社二座とあり是なりん

前小あり埼玉郡の浅間祭神一座ありて尤さる由縁あり此社に

二社ありて殊小古より郡鎮守と云傳へたるを以て考ふるに或

載るもの合へる本居云古社今皆八幡神明稻荷杯小限なり

ありと則是等も其類なり此の社のありも字をも八幡と云

又おもふ此社より埼玉村との地尺寸を隔てなれは古に埼玉村の

神社ありしなりと云ふ

○醫王山遍照院 讀下忍村少き町家の裏にあり寺領二十五石御朱

印本尊大日如來長作ありに金毘羅当寺入口あり靈驗著くして

晴雨をいれ諸人開断あり正五九月太く神樂修行あり此日分て群

参り薬師堂寺内の東倚にあり秀衡松門前左手より松一株を植

碑
建

秀衡松碑銘

增士人傳謂忍城東通照院者陸奧守秀
衡所建或疑奧鎮守府距此數百里非
其力所能及也按東鑑秀衡援數世之
資為羽陸押領使殷富尊榮當時無以
維鎌倉之源右大將猶要脩葺好況三
世相續信淳居士其所經營佛寺甚多
苟舉意興造豈憚遠乎然而院之所以
與者蓋在松樹土人又傳一年秀衡過
此憩道遺之松根愛現不能去乃於樹

以建立一寺安其所懷以護身藥師像
焉而後六百有餘年樹益森鬱人呼謂
秀衡松有旨醫鍼釣者沈靜穎敏非常
人也一鍼之術足以療百瘡嘗過樹下
忽聞濤聲有所感悟焉後三歲享和癸
亥夏六月雷震于樹枝斬盡其害於是鍼
的追念松聲之起予因余工彫其全形
扁之藥師堂捐而恐木猶易朽也欲建
碑傳之無窮來乞銘銘曰
孤松鬱々已六百年竊鳳張翼蚪龍騰
天四時含翠岳加百塵陸侯晉日于此

留連枝葉東靡遺愛可延何國一朝化
 為灰盡濤聲有鉞的也恨震天籟晴予
 因如父母傷其摧悴不忘不負術難救
 匡王不守嗚呼命矣孰之咎此碑一
 建豈千歲壽地久長松手不朽

忍藩儒負眉山

佐阪通恭撰

日藩退職震鳴

秋山晴與書援篆

文化七年次庚午四月甲申朔八之日辛卯鉞科

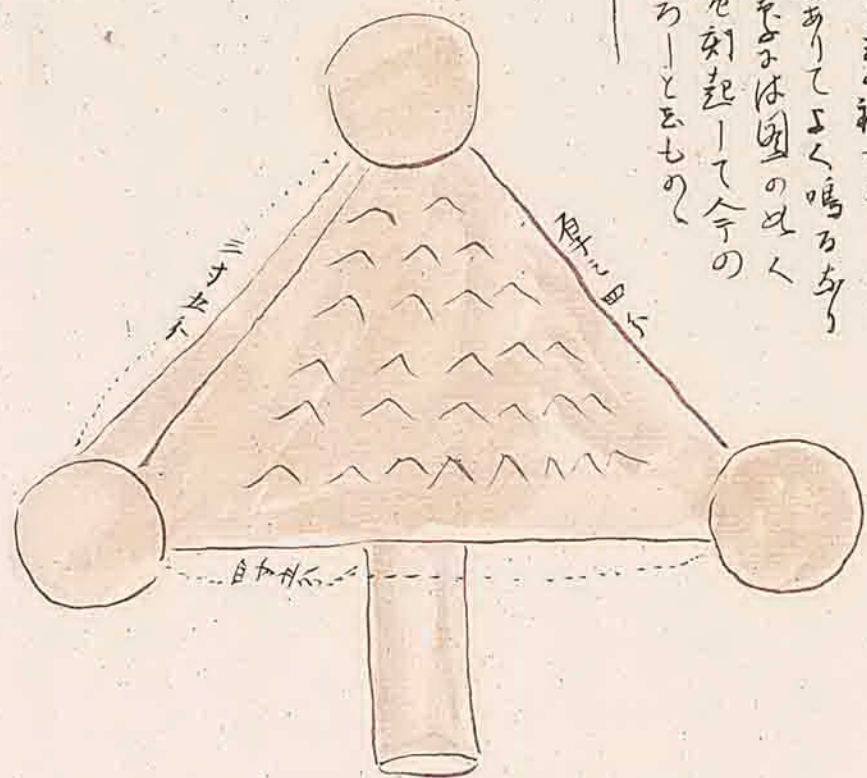
中野鉞的建之

增此松享和年中雷火より焼たり若木を植續人と舊根を堀り一に

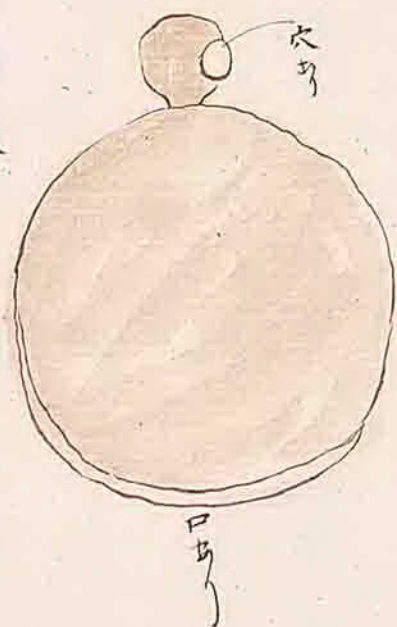
其下より此鈴を堀出せり圖のおと

古器

からの社より多人を交わらぬま
 の社よりこの鈴を堀り出せり
 中より物ありてよく鳴るなり
 三角の形は國の如く
 地りねを刻起して今今の
 山葵おろしと云むの
 こと



柄をきい
 穴あり



貫二寸

此畧何といふ事をあはれ天和三癸亥四月十一日高崎領上州群馬郡
保渡田利畑の内大板の下より草師佛と共小堀出せしとて今月村
西光寺と云へる寺ありて其の畧を記す小是は類する者あり
尚博雅の人より問ふ

増 草師如來縁起曰抑当寺草師如來は行基菩薩の御作し御願ふ
日月二菩薩主神將を安置を往昔は奥州信夫郡信夫といふに
ひて其に奥州平泉の城主鎮守府將軍藤原秀衡卿は仁安元
年春よりより眼病を患ひ寸間も見えりては草師も験なく至難
の折より南部盛岡の城主盛岡信濃守謀略を企て戸崎見次郎并出
羽国山形之城主山形常房を誘ひ秀衡の眼病を窺ひ此虚に乗じて
秀衡一家をこゝ奥州を手に入ると軍勢を催促せしむる高館

次郎閑閑秀衡の元一註進よりいふ是よりして子息三人衣川の閑
へ出張し土居柵木を曲く防戦の用意をす此時秀衡卿御宇水
尊が草師如來へ心願を立七日の断食をかり何卒佛力を以て
眼病不日に平愈ふとて欠むと一心を念ひたまひしは誠利益あり
らるるにて満願の日よりいふ眼中雲もれ速に全快なり衣の閑
へ出張し南部の大敵を追ふは是よりして秀衡卿如來の利益
莫大なりと有難き思召れ聖仁安二年御堂を再建の思召有
し是同年四月八日頃の御夢に如來告て曰是より衣已の方より當て
鎌倉往還の中忍の山より縁の地有り彼処へ送るなりと告たまふ
故草師尊像を御輿に乗せ秀衡寵愛の牛より引せ家臣栗原五
郎秀時小僧にて送らせたまふ八月八日当山へ御止宿す小不審か

我夜の中、彼牛遂に落来せし、ある小住寺、因慶并華尊
王即其夜如來の御夢想を蒙り、是れ有縁の地なりと示告あり、四人
奇異の思をなす。且靈夢の符合せし。小依て則ち華尊如來を当山
小安置し、彼落来の牛は華師堂の南に埋め、印は松の木を植置、栗原
五郎八奥州へ立歸り、秀衡（言上）は其後秀衡より本堂大塔庫利客殿
鐘樓山門仁王門以上七宇、其外六ヶ寺を御建立あり、其砌彼牛の姿を
画せ送り、ききり、則ち当山の宝物なり、但印の松は今の世も傳へ、秀衡松
と云傳へ、一旦華尊如來諸の痼難を救ひたす、小依て參詣日、小群參り、諸
人尊崇せしむるあり、其後年経て、天平八年六月中、石田治部少輔三成、兵
火よりて本堂大塔を初として六坊まで残れ、焼失せし、此時の住寺
慶儀法印如來の尊像を出し、地内一回大焼とあり、然る小十二神

尊像は猛火をさけて大樹の元に移し、せ嚴然として立ち、小実小行
基菩薩の御作靈現著し、和慶長九年住寺、永儀法印の代に至り

し

東照神君御鷹狩の前、当山へ御駕を入らせし、後華尊の由來住
寺小御尋有し、靈迹昔よりは因縁並兵火よりて七堂伽藍焼失
次第、遂に中上奉り、靈則某師へ御朱印被下置、誠以利益の有難き
事奉り、云へり、此眼病の愁を救ふ、信心の甚感應ありと云ふ

東鑑曰、秀衡得父讓、繼絶貞、察家將軍、宣旨以
降、官録越父祖榮輝、及子弟亦送三十年卒去已
上三代九十九年之間、所造立之堂塔、不知幾千万宇云

○約形

通照院の裏手町家、何より、残り、持田村分也

駒形之神社同所より小右の宝殿より一奇衛此所を通り小
馬留り——又義経とも云り孰れも古跡と云傳ふ

○今樂山光明寺 前谷村より遍照院より

不動尊立像 智證大師の作同画像筆者知る

増縁起曰柳当寺の不動尊は智證大師の御筆なり爰に傳来するは
往昔弘法大師遣唐使として渡海せし時殊に不動尊を御信仰
有りて涉利運よりし其後因縁の市法弟智證大師同く入唐の
かより弘法大師御真筆の不動尊と金紙金泥の法花觀世音とを智證
大師小送りしに御浴海のうへに御信心浅き時小大唐おとくし
厄病流行——人民おとし苦し——時の帝より智證大師に此度の厄病
平愈の祈禱をたまふ——宣旨に依て則彼不動尊を祈りたまふ

一七日の護摩八千枚執行せしに忽ち惡病平愈——て貴砂歡ふ事

限り——平後帰朝よりして讃列を多郡の寺に御建立有り是を明王山

智證寺と号し右不動尊觀世音法華經三品をかしき動行念ふなり

——ある小西國一回惡疫流行——人民おとし苦し——依て智證大師御真

筆の不動尊一筆三幅小写——弘法に似せし惡病速に平愈に其后天正

年中に逮て兵亂を恐る大師御真筆の不動尊に国主——献——住寺に此品

を守護——て關東下りけり此時当国に惡疫夥しく流行——人民云に

かゆき人會歎ふ至きあり平氣ふみなり爰にふに於て平愈の祈禱

致しと雖更に驗もかく諸民の歎き大方あり依て当村に於て時の

僧人民助の考として彼不動の尊前におありし一七日執行到ける小実小大

師の御真筆の利益著く——て忽ち惡霧のをもくりぬく惡疫平愈けり

其後彼僧本國へ立歸んと思ひて右の二岳を訪問とせしに不思義あり
不動尊ハ盤石のおとけありて持上得べ又一夜を送りしに其夜夢告
ふて此より小堂を立安置せよとの出事しこれ奇異の思ひをありされ
ハ不動尊の心も叶はれ小堂場少やと早速此より一字を建立し安置
けり于時天正三乙亥年正月十六日此例に依て今の世まで正月七月十六日
を御縁日とし雲驗著し参詣の輩願成就せんとする所已き
病難を免るるを御願あり然るに少や他より厄病悪疾流行する
といへば此村に入りたり事ありこれ遠近信仰の所其曇暗を論せし
余皆絶る事あり

増 本倉稻荷大明神

鍾塚村入口右の方より此處に往古鎮主の御蔵
あり跡多し名よりよくや近年利生ありて遠きところ詣人多し金剛

○ 吹上宿

増 熊谷鴻巣の間より商家茶店軒を並てお對し巻を

水当社の多居の側より野州古武々原前鬼車へ法力を依て一夜小堀井と云
も宿内三丁中程小忍への道あり一里餘あり

山王権現宿の鎮主系土生神とい例多し同廿一日

○ 吹上山勝龍寺

浄土宗鴻巣勝願寺末寺鎮山石印

山門

外金剛力士二王を安置し長六尺

○ 大淵山龍光寺

曹洞宗本尊地藏菩薩坐像 長一尺計行基菩薩の作あり

古碑寺内よりいふも古き物あり文字ありも漫滅して見えに里俗

癰病を煩ひ一時の碑に祈れ忽ち愈るといふ

瑠理山匠王寺真言新義大芦村より本尊坐師如來 長八寸計相像の作不知

むりし出羽國より廻國の修行者負来り此處に休し小篋重くありて

上より此處に安置しける也

○大芦之渡 荒川より川中狭し荒川の趣は川の向を八林又ハ八渡といふ

下小志を

八王寺より日光への街道あり又大の川岸は江府より運送の船着あり

増按る小古へ鎌倉街乃今村岡の渡口より往來せ趣なきも此渡

口も今の如く往來せ事も有る也成田記に成田一族會津へ下る条に

武蔵國荒川に着ければ流清くありて瀬ををせし石に極きて浪の

吹く遠近に浮ぶ群鳥の中へ此鳥身は名さへやうき忍の縁哉年月の

任馴し城を遙く泳れ猶もおとしの弥増していふせし船のうけん

ハ左門尉泰親の室

空海せいのなをひあはれは河川のわき浪を漕ぐに哉

斯口よりいふ丈より田面を色けれを云く畧

小崎池

祢ぬあまのくちくも

あまの

海玉の池のいひも

いひも

手云陰

山々のをささる

池の杜の月

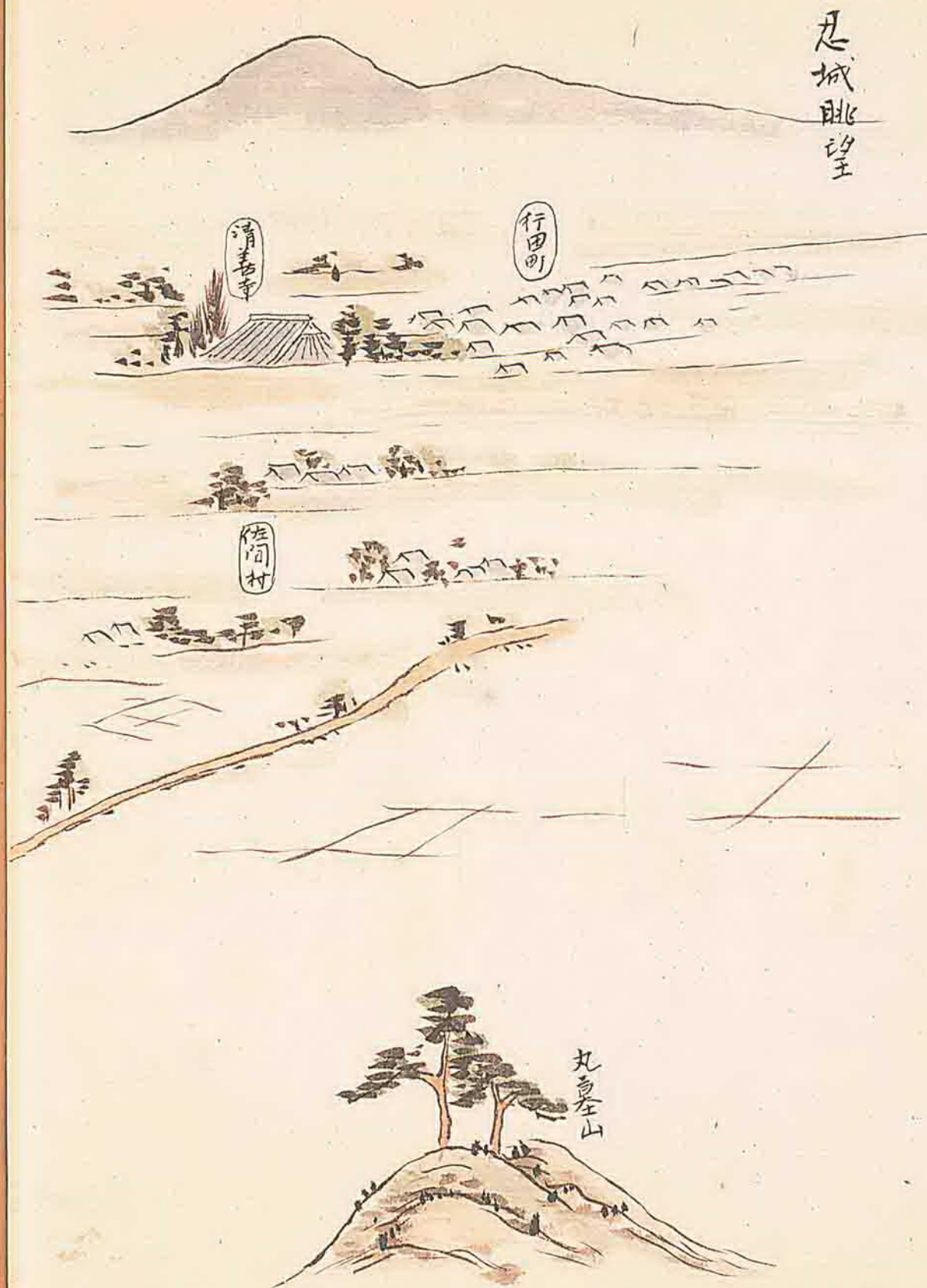
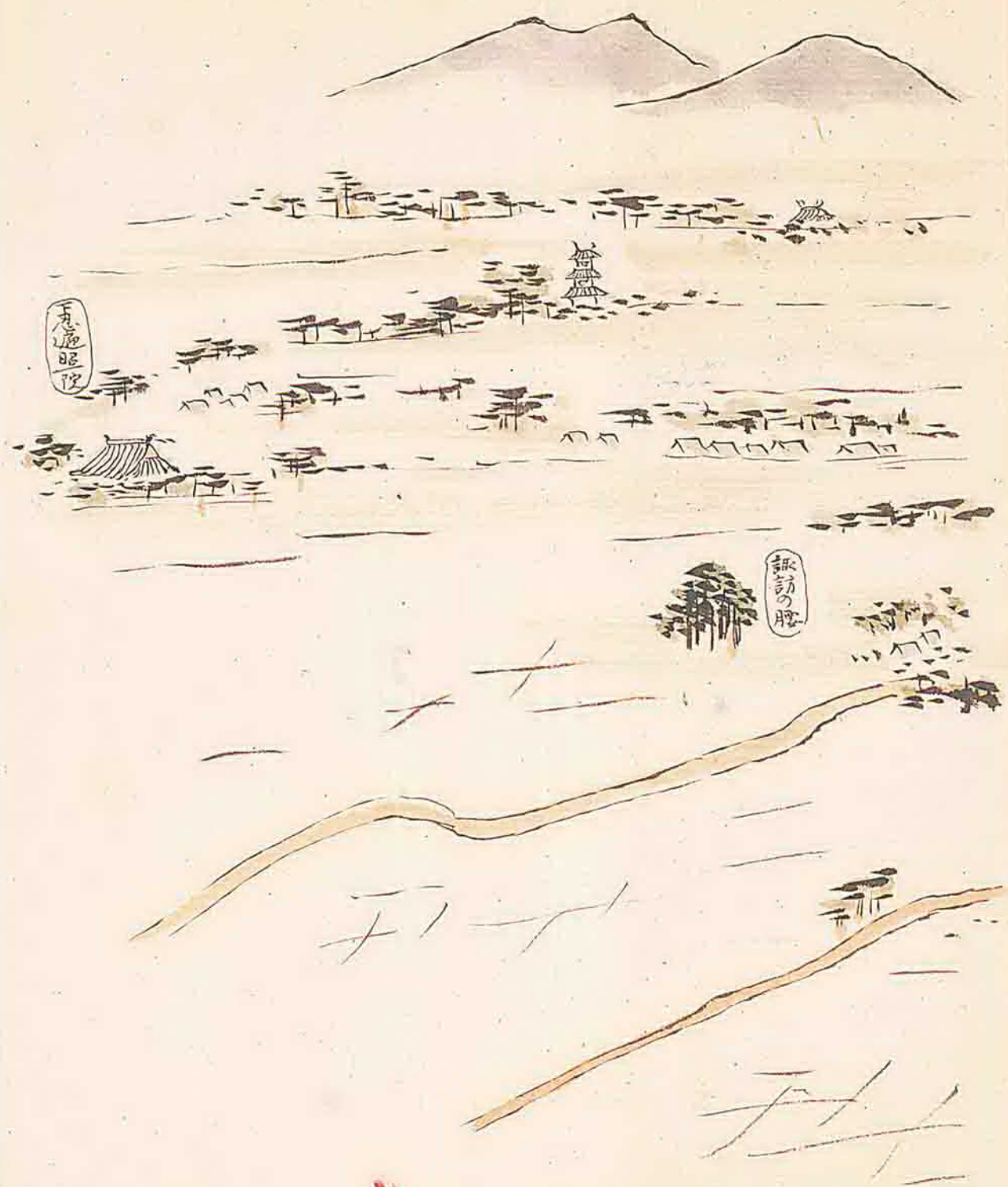
さてや鏡丸

かやて

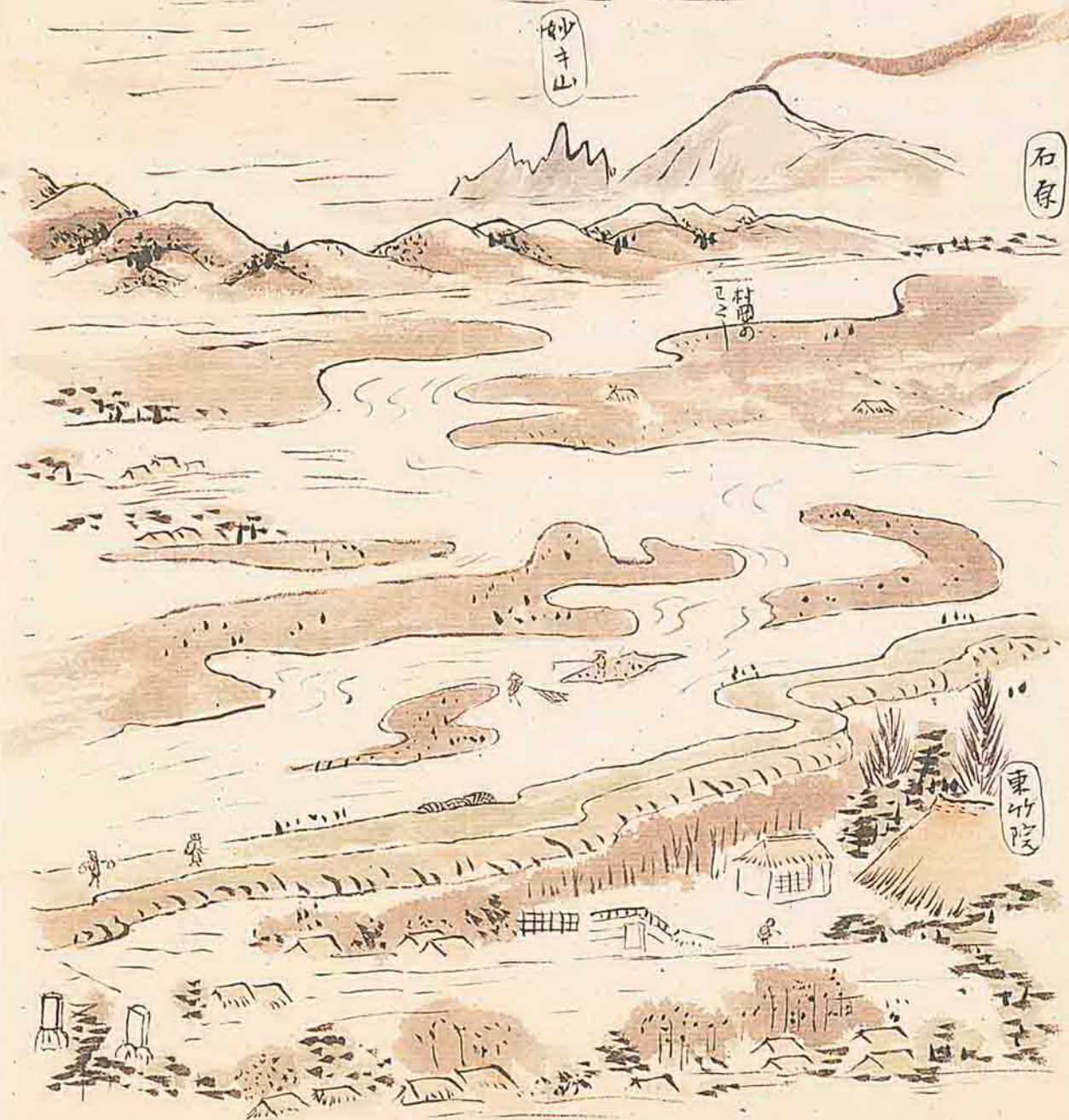
流じん

橋仲達





荒川



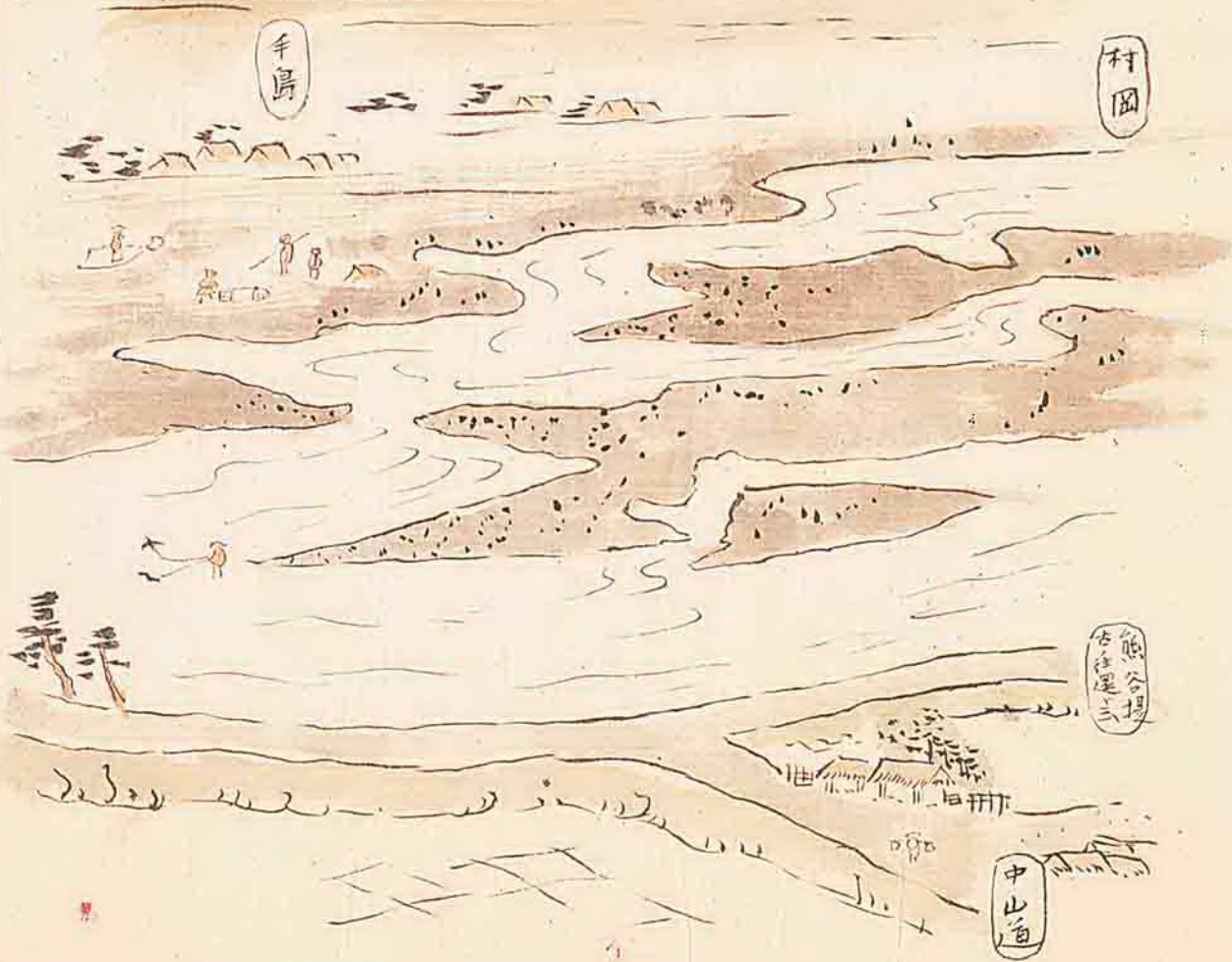
伊州山



秩父山

小川

新田



村

手島

熊谷

中山道



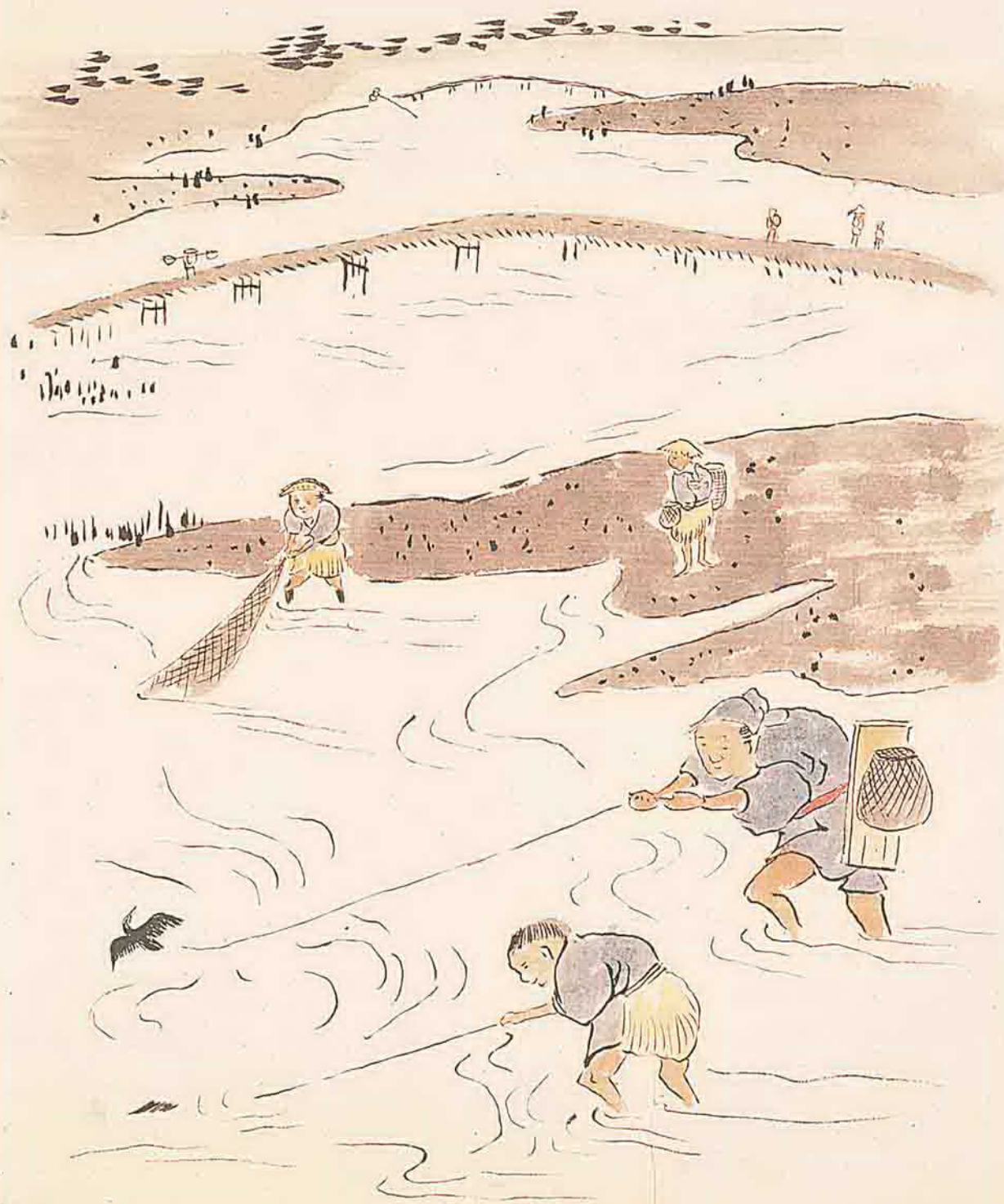
屋戸村



権八地蔵、屋戸村の
河原に四十程ある
忍びの跡、能く見
射、藝、砲術の遠
矢、亦、其、地、に



久下



増入道り淵

但還の右土手外より小き池に芦生て形違ひ、横戸村の内し

相傳ふ往昔熊谷直実の馬取権太と云

因小直実の馬
權を驍々ふるを見

者の第権二と

い者何、強侠の義あり、後剃髪して権二入道と云り時、久下板戸

村より堤の、何ふい何し、聊の論、事起、後、被権二大

強の者お建い入りて敵多く殺し、其後此淵、身を投て失せと云り

故、名、不、呼、と云

増大井村

大井の、何と云ふ、又大井四ヶ村と云、棚田、井、新宿を加てし古

成田の臣大井若狭守、所領あり、とし若狭守子孫、今、棚田村より

土民とあり、近き頃、其具を、持傳て、何し、を家の側、埋藏て

神の宮と崇え、あり、惜む、今、鑑の、を傳ふ、是、に今の物、

う、古、煤、なる、而、已

○天満宮

棚田村真福寺

一車院本

境内あり

近年利生あり

よりて諸人多し俗棚田天神と称す例多し八月廿五日村の鎮守あり

○久下村

熊谷より吹上への間宿の形をみせり

増

此阿ゝりハ市田庄久下と云ふ久下権守直光居住の地あり往還の南荒

川土手下に城跡と称する地あり旧館の跡といひ傳ふ漸星霜移たれば

其跡は絶てありといふも源太屋舗阿ゝりい殿川棚田庄大沼杯に所あり

又三島大明神の社あり是館の鎮守ありといふ又直光の末市田太郎

といふ者も爰に住けりといふ依て市田庄といふもやたし有へり蓋旧館

の地は直光より連綿して住まへり地は直光と左郎の館とを混じたり

あるに直光ハ鎌倉將軍の旗下たり一事ハ人能く知れりいれども

其終小至て詳しきなり

東鑑曰直光者直実嫡母夫也就其好直実先年為直光代官

令勤仕京都大番之時武藏国傍輩等勤同役在洛此間各

以人々代官對直実現無礼直実為散其鬱憤屬于新中

納言和盛送尋年畢自地下向關東打節有石橋合戰為平

家戸人雖射源家其後又仕于源家於度々戰場抽勲功云云

而弁直光列新黃門家人之余為宿意基日未及境遽乱云云

又曰云云一谷合戰大將蒲冠者相從ノ輩安保次郎実光

中村小三郎時經河原太郎高直同次郎忠家小代八郎行平久下次

郎重光云云按ちに重光ハ直光の族あり人知河原安保中村

等此の刃を交すの人あり尚よく考ふべし

成田記曰市田太郎長兼ハ右大將頼朝公の御家人久下権守直光ハ末葉

小一て代々久下小住より長兼の祖久下弥三郎兼行明應年中成田下
總守親泰小服せしなり成田家の幕下となり父弥太郎基兼と
一度も変せざるに依て成田長泰子誠心を感へ娘を以て長兼
の妻とせしなり天正年中忍龍城の時持田口の出張小備ふと成
成田記持田口の事の出張小市田長兼を主将として横田近江
五洲云々畧主将市田代々久下山住し道も彼地要害浅間を
敵を防ぐ便ありと久下を捨て入城し此人は長妹智子と云く
縁者ある故云々畧

増旧川久下村の裏に流る小川をいふ古荒川此所を流ると今も民
家の屋敷杯を堀水に悉く小石あり川下に綾瀬川といふ隅田川に流る
増火とも堤京川の手前爰に小石あり是古の荒川堤成

増一—天正年中忍城一攻来—石田の黨此爰にて日暮て挑灯松明
を燈—所ありと云

増地藏堂 往還の西をつれ堤の上安置に相傳ふ惡童平井権
八郎上州の結商人を殺害し立退—此あり利しと故に里俗権八地藏
と云と也又東竹院裏の堤小あり地藏しと云ふ按る小是と稱と東
竹院の方へは流る古の往還ありて人家稀なり処あり熊谷堤とい
旅人夜行を恐れ—とりの芭蕉翁う句ふ

堤名—日也—鐘ハ熊谷寺 見え哉

去の日のいと長ふ小夕音の鐘なり守ゆるに程路なり
古のさよおもひ思ふ小足道なり

○梅龍山東竹院禪洞家龍淵寺末御朱印寺領三十石惣門横額洞上法
應月丹書

山門

楼上十一面
觀音九女置

鐘樓

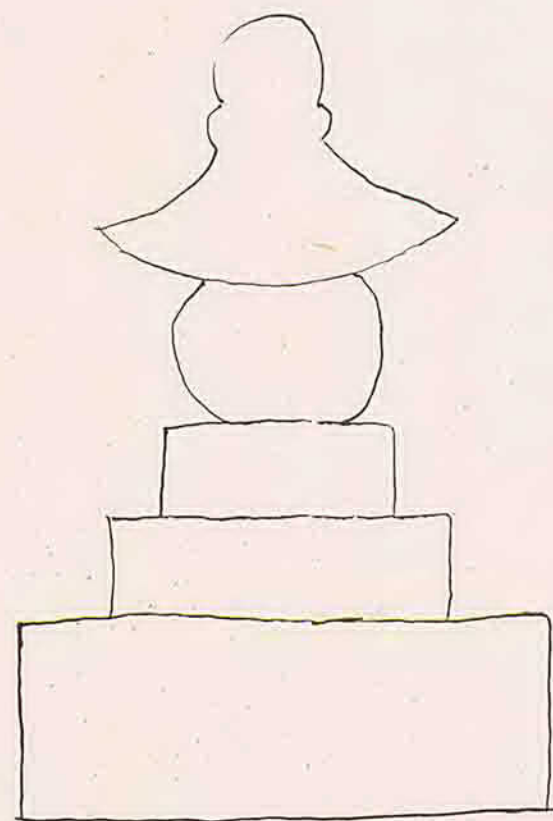
寺内左手
小所

禪堂

右手小
所

直光之墓

本堂の後小所



上松家女子之墓

同處小所 五輪の塔に文字見へん深谷上松家此

娘なりのいふ傳ふ

当寺に建久七年權守直光の開基あり中興永祿年中深谷の城主

上松名不知再建せり其後寛永年中焼失して後今のとくに堂塔再

三建立せりといふ

○荒川

一面小石の川原あり水幾筋も流れ疾き夏の水まで鮎

ひらう美景のよみ

増

荒川は忍より一里程し水源秩父三峯山なり中津川より出て下

戸田川に經て佃の海に落ち此川水清くりにして初なる頃より鮎すし

鵜飼簀瀨張投網杯くもくの仕業もて漁に鰯鰯等も稀に得る

事あり鰻又多し今東都の市中は荒川大蒲焼と稱して彌常く物ハ

荒川の物味ときを賞されあり

増

鰻 本朝食鑑曰云く江東亦稱美者多江都芝之渾

市所鬻者玉川之産而最大其味極佳深川之産美者多

其餘利根箕輪田中荒川之産味絶勝者不少云云
 之下の榮肆にて鰯鮓を製して彌常く名産小等し
 又川の瀬小多に鮎の腸をれにやれをうるうとよへり老女
 秋さひの鮎の腸をやりかたはずし小まをち、婦人母 西行
 此二首ハ秩父風土記篠栗瀬村の条小載なり、同書註に村名を篠栗を
 打く、今不忍市鎮分川辺小に篠栗代しふり有り云と有り
 此記を見ればひう事も多かれ証とまら小是く以老女歌和漢
 三文國會のせり

増補忍名所國會卷之一終

増補忍名所國會卷之二

洞李 香齋著
 岩崎 長容増補

城北之方

○妙法山蓮華寺

法花宗池上本門寺末 本尊三空尊

日蓮大菩薩 木像長二尺計 日法上人作

本堂横額妙法山筆者陳元啓正統梅峰

堂敬書

増 按るに元啓ハ明末の人にして我朝

の頃舜水と共に

明朝の乱を避て歸化せし人なり 後尾州に住に深草の元政上人親

しく常小詩を以て唱酬せしもの

鬼子母神堂

本堂の前右小あり

長八寸計 三十番神堂本堂の傳教大師作

前左手小あり 古碑南無日朗菩薩と有り 裏小元應二庚申正月廿日有

今酉年と五百四年にあり 酉年、洞李音研の 日朗上人真筆の碑門内左手

にあり大黒天 日蓮上人の作あり

○略縁記曰夫当山開基日朗菩薩なり 当寺往昔は真言宗にして
同国埼玉郡小見村よりきて既ち数百年とありしなり 文永年中
日朗菩薩佐渡へ旅行の時黄昏小建人として頻りに宿を乞ふる僧を
難儀して寺内へ招き暫道路の風行を 諸僧より宿善や催しん
終に佛法之大儀顯密二教の論ふがひ敷く問答小至し終に法花經
を讀伏し此地を以て日朗菩薩よりきて永く法花靈場を建ふんや
と申しに日朗のみく歡ひむし則時小妙法山蓮花寺と改られ天下安
全國家豐饒二世満願の爲の靈場とありぬ 百余年を経て忍城主
成田何某城の鬼門小當り一乗妙典の精舎を建祈願所と改まんと

あたふ折る幸ふかて此寺を以中興元電の以行程を里より
を經る忍領谷郷へ引移したまひ永く國家鎮護の精舎とあり
あり

○谷郷村 谷郷の谷より里俗谷の谷より

○春日大明神 谷々村畑の中森の内より 和州奈良より遷り

といふ年月詳なり 当村及び行田町の出生神といふ

例祭日不定 別当 山定院 僧驗

○増 古く奈良より神使の鹿来りしなり 時土人は是を打殺しけれは
其人狂亂して死せりと我々我々其の由をたえて来るなり
里俗より傳ふ又此村中小茅頭を植ふ事を禁に極れ必宗
ありといふ当社よりきての由縁ありなり されとも委ふなり

(増) 成田記曰当社ハ藤原氏の祖神なり成田家代々崇奉あり中略
 天正十五丁亥年の春成田氏長当社に参詣して武運長久を祈願
 し拜殿におあり奉納の連歌具行一氏長が句これに随従の連
 歌師園生随傳小姓桂千菊横池虎一堤笹千代杯各連歌小加ぬ云
 其後句一二をたふす

武原へ狂雲の花をく神の春 さえふ月ふ朱の玉垣 霞く小柳葉うたふ夢ハ とものふふ小袖のうん 立ちふる都のりくや近うし 道の行神ハ 夢はなんぢなり	氏長 随傳 千菊 虎一 笹千代 国松
--	-----------------------------------

〇チ、あきしる山のけり霞事
 春をたふさる雨のふりや
 能長
 虎次

〇 行田山明王院 山伏同村入口右手小河 不動尊 智證大師画脇二童子 智證大師筆

身代不動とし 不動堂横額行田山ハ阿部正職侯の筆也

(増) 当院不動尊園城寺什宝二幅の其一幅なりとし相傳ふむ

成田下総守 知不園城寺小暫在しより後割東下り一時是を
 得て来りその後当院へ預布むしと古ハ行田新所今の法性寺前
 河より小河 寛永年中爰小轉て開祖ハ阿達利宗貞と云治
 義三巳年八月八日 遷化

(増) 駒形大明神 同村の西倚宇ハ二家とし小河 古傳ふ
 むり 血尾村雷電宮へ右大將頼朝卿より奉幣の為小梶原

景時来り——時馬より下りて憩——憩し神体ハ駒の頭を置至
て古雅なる物し尤木として刻るもの

増

梶塚大権現

駒形社の東畑の中より寛政年中ハ石碑を

建る梶塚大権現と鐫む此迄都て梶塚といふ梶原四尾雷電

へより此所時馬を繋ぎ——要しといふ近き頃迄ハ碑しかく名のこ

かりの里人等此處を馬に乗りて通り或ハ誤て不浄の類を

かゝるハ忽凶阿るに依て今の如く碑を建瑞垣を結て崇祭を

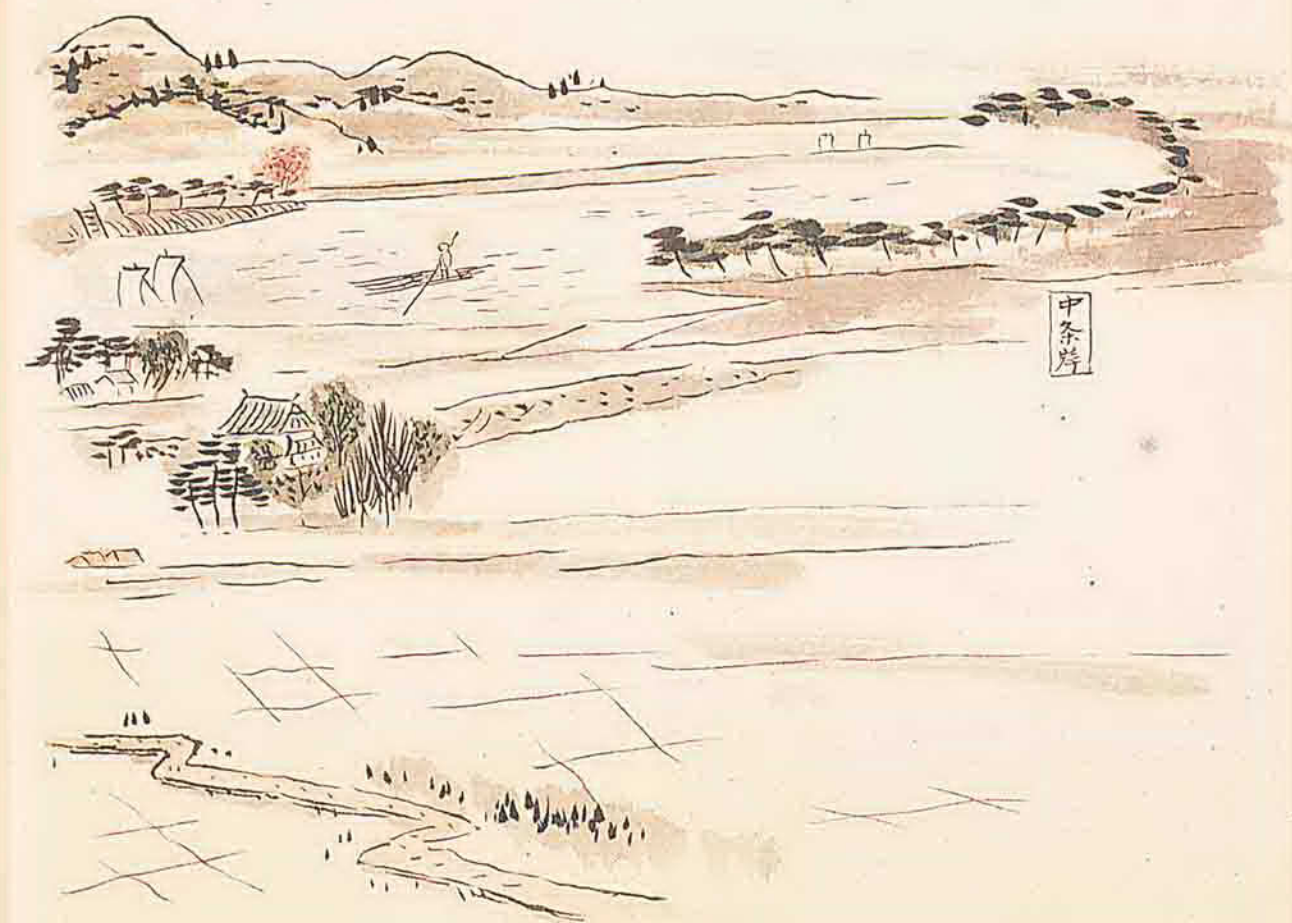
とせ此村の内昔鶴ヶ岳の宮寺領といふ——事東鑑に見えたり

今其地いへばなりと云ふ

東鑑曰寛元五年七月十六日大納言法印神鶴

岳ノ別当職之後今日始有拜賀又宮寺領武

刀桶川



中条

新田山
浮雲
夕立
利根の
川
上湯
真淵



新田山

真淵

其二

刀祢の川原

新初

母ふい袖丁

甲の

刀祢川の

石の跡むも

刀祢川の

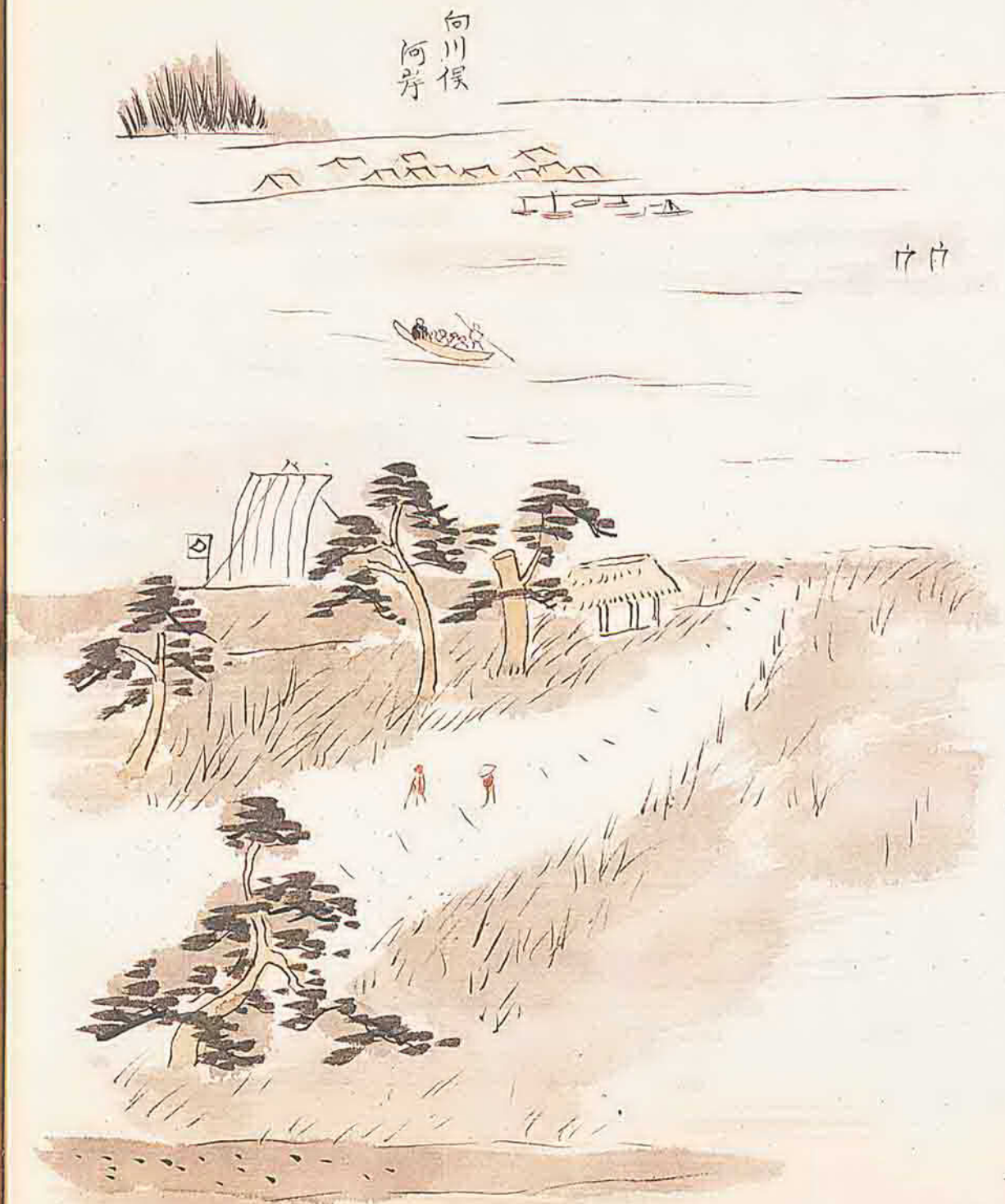
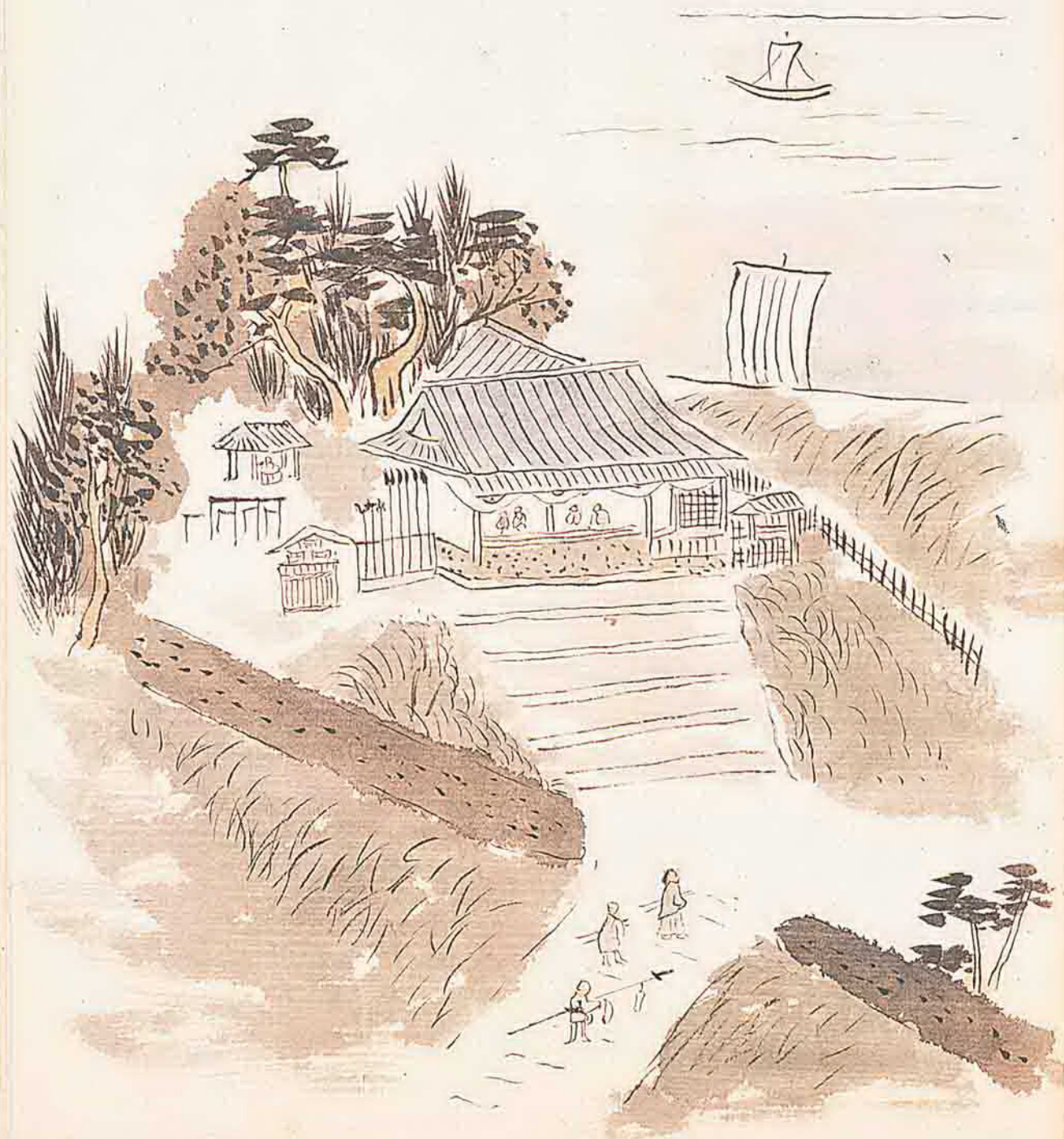
しる



新々
川俣町關所

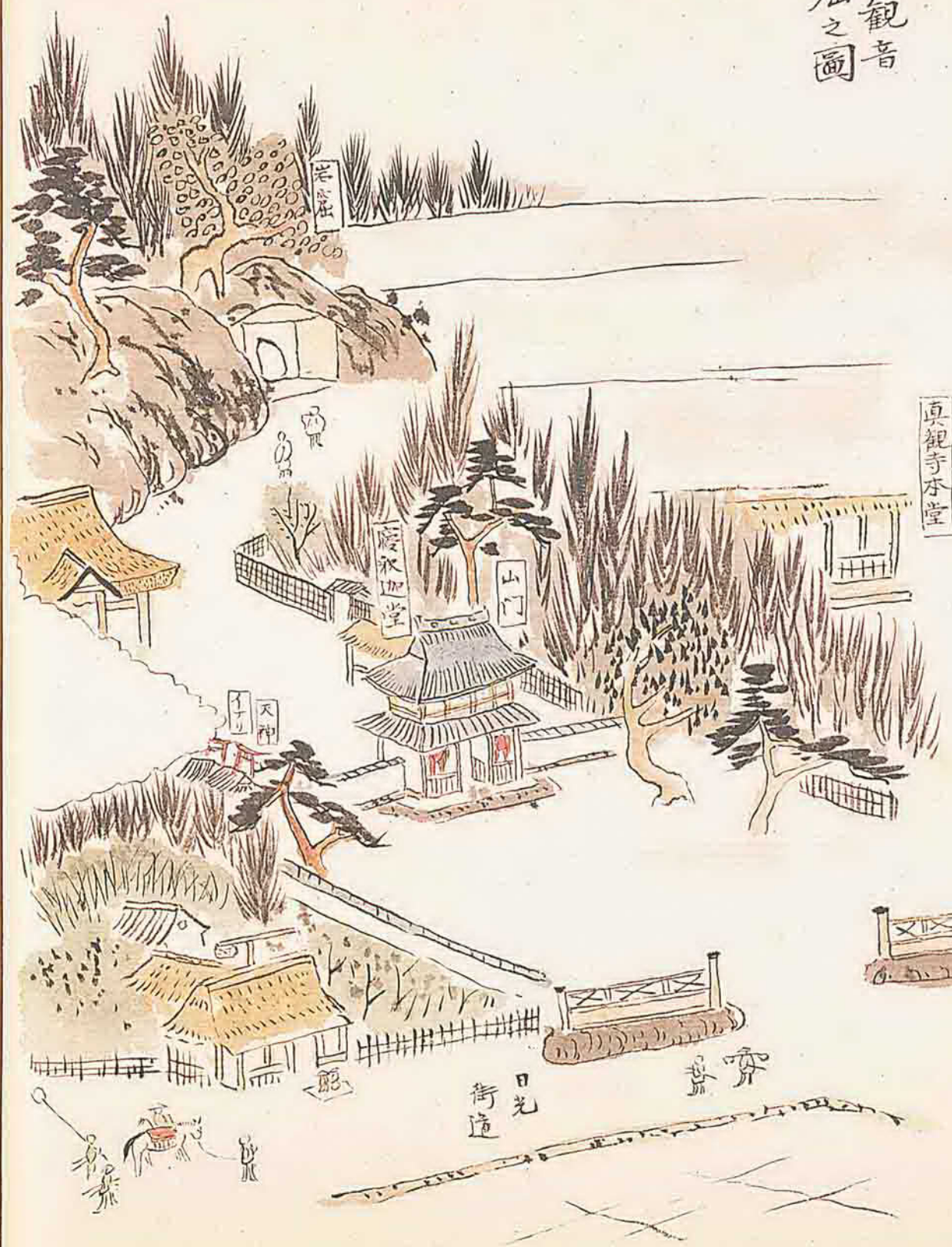
向川俣
阿芳

竹竹



小見村觀音
岩窟之圖

真觀寺本堂



風國矢古宇郷ノ内以別当得分為御續經料所被
始置不斷大般若經轉讀ト云々

増 利根川 又稱万福川坂東左郎といふ坂東第一の大河なり酒巻

及び中條の河よりみて川幅十丁余も河々々々 李春より首

夏の頃迄水涼の雪解少し水増速利

増 利根川産物 鯉 鱸 鮎 鳶 鱈 鮒 鮓 鮓 鮓

本朝食鑑曰云々 凡東北大河米之本朝式丹波丹後
若狹越前但馬因幡貢生鮓今越後越中飛騨陸
奥出羽常之木戸秋田最多数然之鮓子下野州之中
川上野州之利根亦有夏末云々

鯉

同書曰云々浅草川の産美者多其餘利根箕輪
田中川荒川の産味絶勝者不少云云

○増百川朝宗曰利根川上州利根より流れ出て多くの川に落合

て川路二千八里余お流る栗橋御所前より二口お流れ一ツは

南の方権現堂川といふ江戸へ落合一ツは栗橋宿より東の方流

赤堀川といふ川下下利根川とお唱東海御子口一落申儀

万葉集云

刀稱河泊乃可波世毛思良受多和多里余美

爾安布能須安敵流伎美可母

六帖

利根川ハ上ハ濁りて下澄てあるにものなる君が恨

新勅

世ハ神ハ我ハ人の心川の石ハ心もいさ川より

○阿弥陀堂

利根川堤下須賀村より別当小笠原如來堂

東都上野御末本尊阿弥陀如來長一尺二寸作あらん

○此阿弥陀佛ハ当村百姓手高と云へる者の庭中ハ雪ふれも積ら

ざる所なり只折て光明を放つ事あり掘見ハ此如來を出せり

依て領主ハ誨へるに則て如來を取上げし七島ハ包て江戸をまひ

炭の屋舗既の二階揚置に又光明を放ちあふりなり然ハ

桂昌院殿御聴小達上野御坊の成に於て堂宇を所建立しりて

安置し玉ひり時ハ桂昌院殿御眼を煩をせたり寸間も見え

よきより医療尤急なりとて之を驗ふく爰ハ薩州の藩医田宮山

なり者なり類ハ眼科練熟の医なりけり種々手を尽すと云へ

類驗しなりされ詮方なりや思召人日比念一たふ此如來を

旦夕只脚一心不念一たふい一お納更まりく人武夜御枕の元お立ち

て元出現の地忍の須賀村一安置せし所不例市平愈々人々御告り
見たるに御夢覺むと思ふも亦有りて思ふに早達此地
へ遣ふに夫よりたかき市平愈々一不依て此れより少く若干田
地を寄附しむ此時彼匠一山と九夫の力及する程を感一且如來の
利益著き信仰して其職を退して爰に來り住み則て菴の開
山是より後不爰に寂に

増因ふ江府上野信濃坂とふ本あり如來あり一ふ如來又善

光寺と同伴あり依てふと此中あり

佛龕 桂昌院殿の市寄進

額無量壽堂 阿部正識侯之筆

司阿弥院堂 薩摩守中將吉貴侯之寄附

琉球中山王之索書大清福州鼓山沙門大心禪師真蹟

為一三九八

阿弥陀堂

横額

横六尺余 堅三尺半
地金 文字紺青入

増須賀修理亮恭隆旧館之趾

荒木村より須加村内へ入る路の右

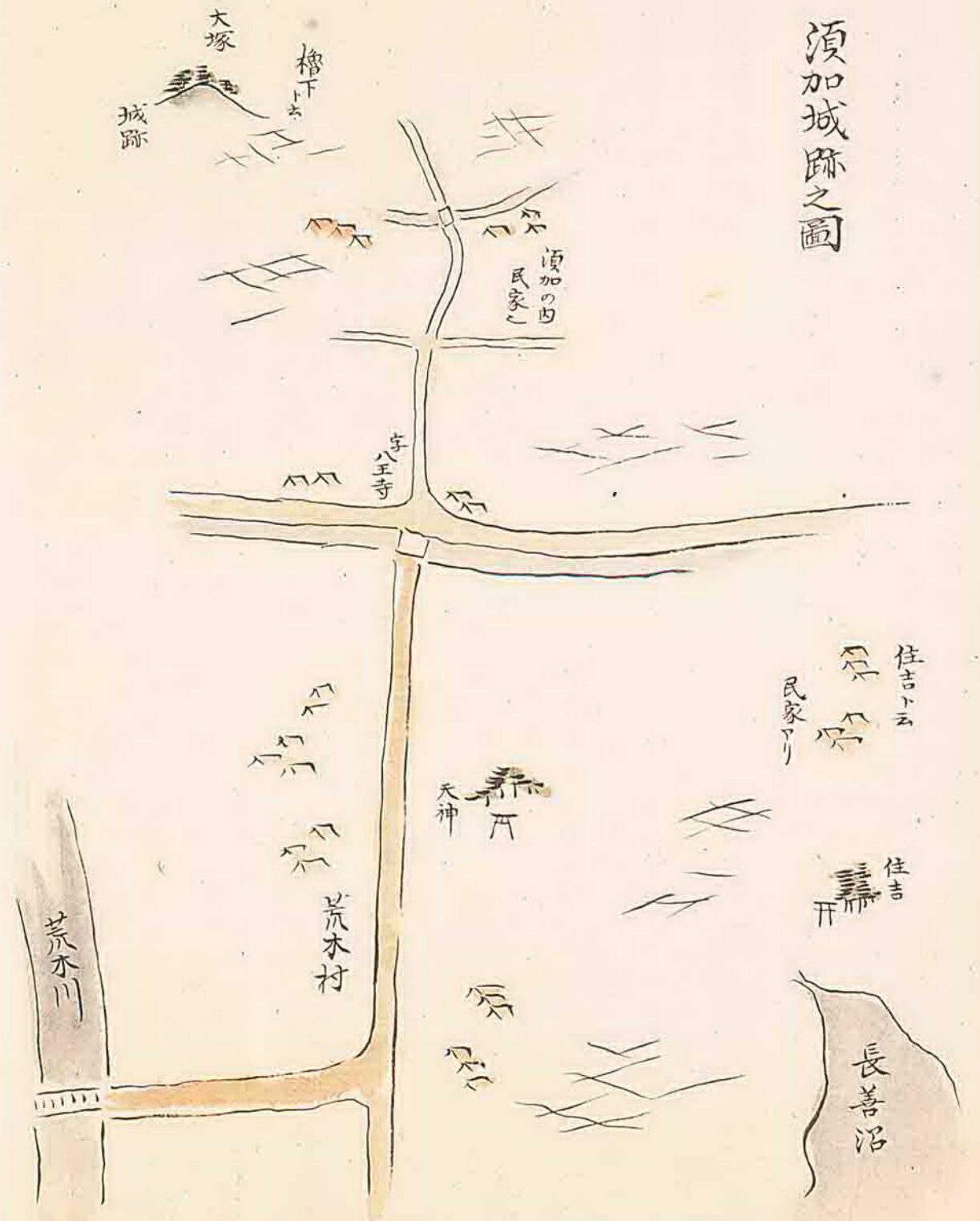
手ふり大塚槽下杯の名のし猶りて其形に絶てなり田疇とある
須加恭隆・成田氏長の姉姪に代り成田家へ属せり天正八年の

籠城ふふ丸なりて一門の列ふ居り

成田記赤井勝元思意を回し一ふの城を責落ものふふハ
其余の城ふ手を下りて降参し小武藏を掌握せん事安し
軍勢五千余騎を相催し天文五年八月上武の境利根川を押渡り
住吉の南ふ陣を居る忍の城を攻んと成田長泰此事をす
居るふ敵を引受るにけり城より一里余押出荒木川を
前ふ当其橋を引落し小箕の堤を楯し敵川より上ふ中途を
討んと待掛ける折ふ霖雨ふ水難くや有ん於豫
して居るふ要ふ成田の旗下須賀出雲守隆宗兼て須加の城に
在るふ所ふの兵士五百余人を引率して赤井の陣の裏手廻り旗
旗を風ふ翻し整しと押掛る敵の軍兵此勢いふや吞れけん

白石豊前守の二備忽ふ崩れ立川を渡りて外歸し軍中一度
動揺し数千の兵士聞定しか多散ふ小乱れ東西ふ走り或は利根
川を渡るも河の須加の軍兵勝ふ衆て追討し首三十余級を取
勝時を揚て歸る大將赤井のやうと敗兵を引纏る元の陣より
遥ふ隔北ふ寄る陣より今日須加の兵ふ見怖して是
苦む敗せむ深く憤りて夜残兵を引具し須加の城へ押寄三方
より火を放ち無二無三責立し元来浅間の要害はて勢ふ少
殊ふ今日大敗の事ふ夜討りありと思ふ依るに油断して
あつたゆへ城中防ふ便り失ひ終ふ堪難く出雲守をもち兵
卒城を外れ出成田の陣ふ加りなり云

須加城跡之圖



○中条川岸

利根川堤下中条村の内、東海道の廻船問屋あり

○酒巻川岸

右におり酒巻村あり

○増勝呂大明神

南河原村民家の東にあり川原太郎高直の造立と云

高直揚州より出、人少く往古の神を信仰し此地より来りて後川

越領勝呂村の住吉を爰より移り依り勝呂の神といふと云へり社領

市朱印四石五斗別当本堂院修験

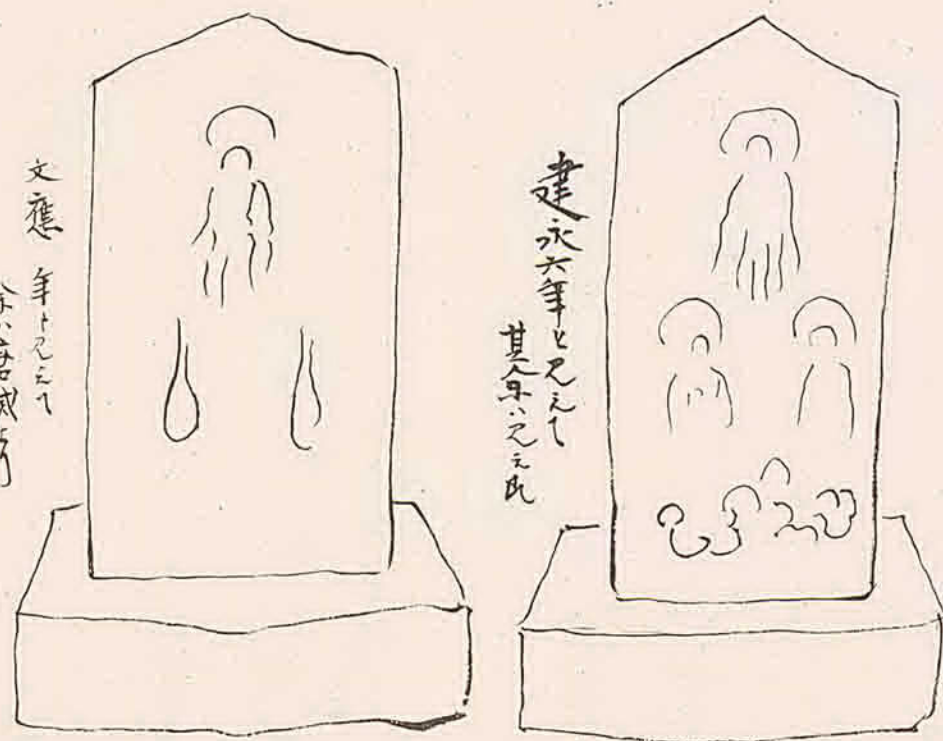
○増真南院觀福寺

古事記言一条院寺川原太郎高直の草創と云

云々市朱印四石八斗高直兄弟之墓碑本堂の後より

太郎高直之墓

次郎忠家之墓



建永六年と見えし
其年六元丸

文應 年ト見えし
余ハ磨滅ス

増 今村佐渡守重光之墓右同所ナリ

碑面 蓮東院恭翁道壽居士

旧塔再建堂

天正十九年八月十七日河原姓今村佐渡守重光

増 長門本曰上畧濱の大手ヲ蒲生冠者範頼大將軍トシテ五万騎ニ

押寄たり我々ト先陣也心を以て兵多くなり中々武藏国私

黨ハ河原太郎高直同次郎盛直兄ア二人馳来て馬より下り生田

の森の城居 攻寄て居ぬき逆我々乗越て城の中へ入るを城中

より備中国任人真鍋四郎トシ有るなり四郎ハ一谷小道丸なり其助

光究竟の弓の上手精兵の手よりなり其木戸口小置道なり其

河原太郎の乗越るを見て是のめりよりひいて射し其河原

太郎の弓手の草摺のをり射させし膝より其杖よりなり立

此を弟小次郎つと寄て兄を肩よりけ帰る所を 助光又よひ
 みてこの矢を射たりやる小次郎妻手の膝の節よりくりにせられ
 兄と一枕よりをれ ふやう云い 重光ハ太郎高直の末葉ホー
 成田家子属ハ天正役小籠城して軍功ありといへ 軍記ホホ
所見あり 子孫
 頼当村に散在して民間に下る 今村河原太郎左門といへり 司所
 入小川原高直舊所と記し石標あり

増 高直 旧館之趾

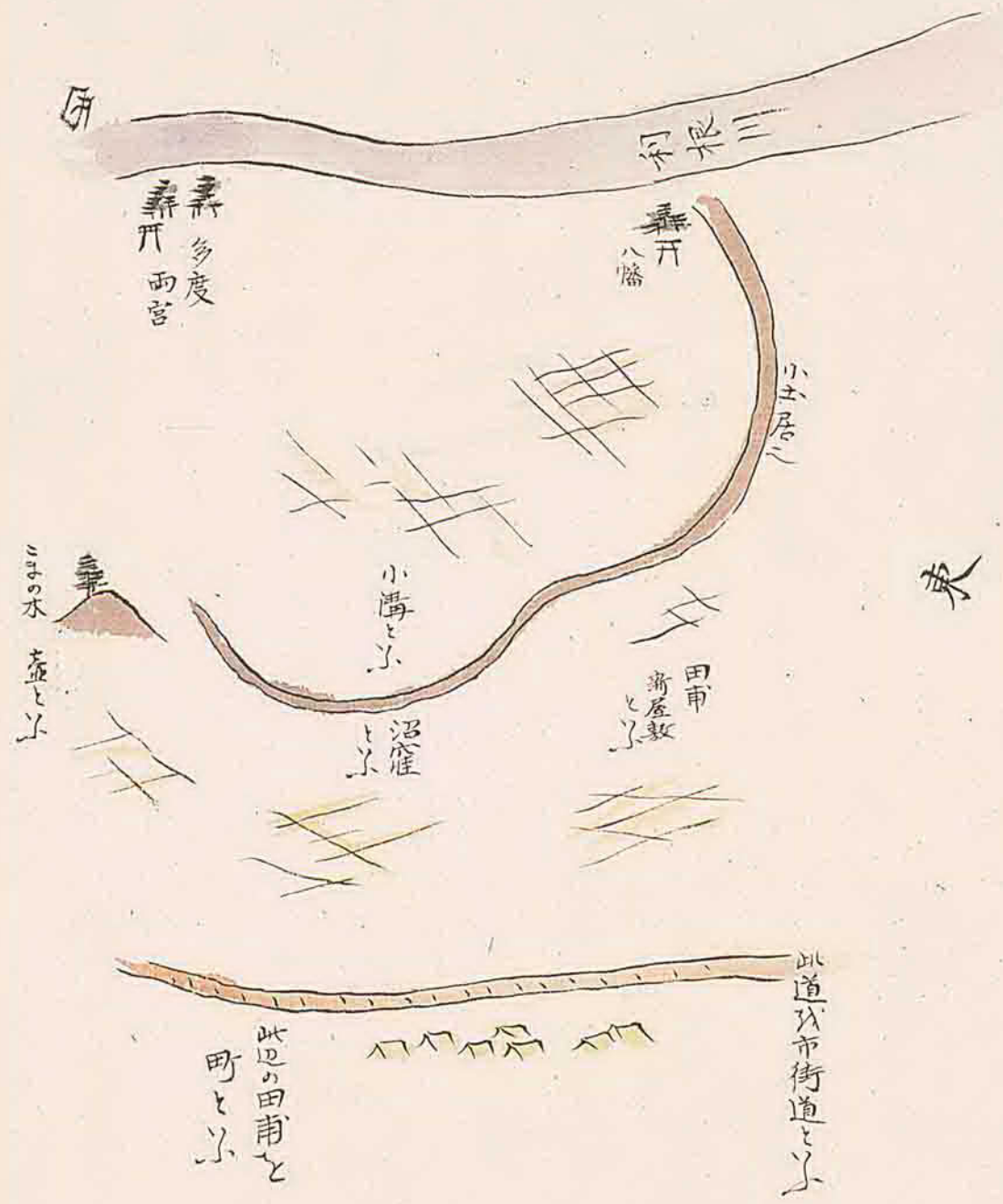
同村北裏の方より 堀沼の面より聊残

りて昔は忍ふ小堪えたり 疑ふく重光の
旧館か

増 多度両社

利根川内堤の側より 文政年中北伊勢より

君侯に置かき 靈驗著き事近国に表く



増神護山淨泉寺

洞家竜洲寺末下河上村川の辺にあり寺領

卯朱印二十石本尊阿弥陀如来

屋像毫尺計
化あり

縁起曰押当寺は往古何の帝宮何人の開闢といふ事を以て保延
六年に建立の門存在して今七百年に及ぶなり其地を中古熊野
権現の岳跡なり竜洲三世祖儒和尚を招いて開祖といふ又当寺
開基本無上杉居士開基不識院真光謙信大阿闍梨法印と云
と牌堂内より其境地の前は星川の流清く後山林と云
中小本堂山門廻廊鐘樓寮舎坊舎備りたるなり一室に至りて
慶長九甲辰年十月

東照神君より

卯朱印二十石を賜り代々お鎮まりおる靈場なり

とや天保三年上州邑樂郡五ヶ村の田島氏より弥陀の尊像を安

奉納此の尊像は東武何某侯に勤仕の城主君の持佛ありしを

給り歸村して家の持佛として有る代に故障ありて漸く朽ち

へ至是非其邑の堂へ告ぐに又其氏族へ崇り程々の病難

あり爰に不思議也其家主へ夢の告り我々是より南西に衆生

結縁の地なり是に移住せよとの夢想あり此何と云ふ事なり

告給ふに依て其氏族へ五ヶ事あるを語りしに南西あり我隣村

下川上淨泉寺ありしに中江袋の何某語りしに皆一同に是

に依て則ち當寺へ還へ本尊の前へ安置し奉けるに日し感應靈驗

著して近軍遠境歩むを運び群を以て誠心念佛衆生接取

不捨の端あり益日盛んし其賤群集して門前より市を以て

此前縁を説稱功績の由來後事不朽の日時を傳へ永く山門の記と

四天门 外四天王を安置に 惣門 保延六年の棟札あり 鐘楼 四天門の東あり

熊野権現 寺の東森の中あり 当寺の鎮守し

熊野縁起曰一夜雷電暴雨俄に起て堂上に震ふ雲中より神あり

白衣よりて我たる冠を著從者ありて云 惟道 当山開祖の桂儒和尚

ふ来て我は是紀州熊野権現なり 久敷和尚の道風を嗣て護法

の為殊に爰ふ来りて寺境の古より安んじしと告給ふ師歛る恨

みく此事師人見て他人見るより 是より号て神護山とふ遂に

神の指揮為給ふ所へ神祠を造営し 師々永正十六年十月七日

遷寂に

○藍澤明王 此の西倚あり

増補忍名所圖會卷之二終

忍名所圖會卷之二終



四天门

外四天王を安置に

惣門

保延六年の棟札あり

鐘楼

四天門の東あり

熊野権現

寺の東森の中あり

当寺の鎮守し

熊野縁起

曰一夜雷電暴雨俄に起て堂上に震ふ雲中より神あり

白衣よりて我にたる冠を著從者ありて

多し惟道

当山開祖桂儒和尚

ふ来て我は是純州熊野権現なり

久敷和尚の道風を嗣て護法の

の為殊に爰に來りて

寺境の東に安坐せしと告給ふ師歟する恨

みく此事師に見て他人見るより

是より号て神護山とふ遂に

神の指揮を給ふ所へ

神祠を造営し即ち永正十六年十月七日

遷寂に

○藍淨明王

此の西倚あり

増補日本書紀卷之六

足利國編、田河能知





増補忍名所圖會卷之三

増補忍名所圖會卷之三

洞李 香齋著

岩崎 長容増補

城東之方

○八幡宮

八幡町あり

神主

相岡若狹

増田中の八幡といふお社赤土社殿なりといふ（お田の中より）

文政しを成田下院寺補修し市城下の鎮守といふなり城子ハ

幡といふ後今の如く町割なりといふ八幡町といふ此所より功進のもの多く

住し居りや大工町ともいふさき裏町城本町といふ

○龜通山行由院大長寺

京都百萬返末下町通りにあり

本尊阿彌陀佛

座像三尺計
作ふさけ

多門天堂門の向ふあり額多香閣象

書南樓蘭其寧書 鐘堂の北あり

大佛 唐銅釈迦佛座像長八尺計 沙門信阿和尚奉納
連坐亘六尺高サ二尺余

古碑 門の北あり 曆應三年より同年まで五百年二三四の古多し

増 小沼堂 大長寺末長野に池門外あり小菴あり

増 芭蕉翁句碑

古池や蛙跳込む水の音 七世

唐銅地藏佛 座像六尺計

増 亀甲松の跡 町屋の裏あり松枯る所謂又云は

長野村 町家あり櫓の馬場といふ東の石は江戸馬場移り

昭々

馬場 三丁程土の上は波岩櫻樹ありて花の以て殊小なり

應珠山擁護院長久寺 新義真言山持国寺治部報恩院末

馬場の中程ありと領三十石御朱印本尊觀世音 座像三尺計
作五尺

不動堂 本堂の右あり

當寺は文明年中成田下忍守顯忠草創しを代に新修なり

開山は傳之也文明年中寂を

久伊豆大権地 長久寺の北あり

増 我空堂 小菴あり村の中程ありあり藤原公家御書

増 縁起曰此堂藤原公家御書に佛土のきこめるなりと云は画工の画にあり

河の大權聖者の加持力ありて凡夫の眼に足えなりと云は
延暦年中に鏡の影のうつりぬく谷に虎の音ありと云は昔弘

法大師よりいひ此堂に加持ありと云は昔弘法大師よりいひ此堂に加持ありと云は昔弘法大師よりいひ此堂に加持ありと云は昔弘

またとて頼むるものハ必利益城蒙。何と云ふか（一）是にハ
此方より定めうやき——中々——と云う本は何の本とも傳は
しつゝ大槓有て根より水湧せぬといふ病愈なりとは是の
其の時にも明かにある後と母大師の後に少也大師の植
むけに（植えて成なるも替りたるある時）元禄祐の頃に松の枯
株少し残して有りてあれも朽ちて何もしなす垣地結く（直に
百餘年経る元禄十四年）との言像とある（直に）奉め是元の枯株の記
形（昔の人）而して造當せるとありのいふ生夜の夢に重塔造
営（人）といふと御告なり——と云う昔の如く本が真なりといふ（即
若し何の言にても）解かるに本利益のいふ事も如きのあり
らひをして是の目火見えさせ給へさ進とも常位不変にあら

此事の如く不知なり。正徳六年二月、此地に住する僧、
 親しく友人あり。夜、不薬し。にそ夜二人の者、發熱狂亂して
 云、我、此地、尸、埋、す。某、師、如、來、滅、識、なる。其、罪、重、く、苦、惱、也。
 又、う、也、と、云、る。倭、人、忽、死、す。然、れ、に、忽、ち、復、生、す。夜、不、薬、師、如、來、
 其、後、平、太、師、の、師、云、某、疑、ふ、者、に、死、す。然、れ、と、母、是、より、所、入、の、位、作
 流、増、り、ぬ、此、地、に、つ、ま、の、時、に、云、く、流、増、り、ぬ、毒、死、す。う、毎、夜、深、更、に、
 此、の、く、す、流、増、り、ぬ、何、者、の、位、業、も、云、れ、お、は、さ、る、う、の、り、と、
 云、は、是、より、云、く、倭、人、の、く、の、毒、を、ら、ゆ、り、は、此、邊、の、田、圃、に、お、は、
 り、た、毒、の、跡、に、り、地、の、名、に、云、く、り、た、の、毒、師、と、稱、し、なる、者、に、
 世、に、蝮、毒、師、毒、師、の、如、く、思、ひ、出、す、と、い、ふ、有、る、謂、や、ん、と、云、人
 阿、り、地、名、ある、跡、に、云、く、斯、く、云、く、し、毒、を、毒、に、する、者、に、利、益、と

○愛宕山

宮祠あり

○増 清間山より並ぶる山なり。山に

○増 葦山

同村の入口右半民家の裏より葦竹有る名は古碑二基敷の中より元久元年甲子年とあり今年迄有る三十二年一基は文永三年とあり同百七十四年一基は子の標あるものなりと大方減碑して見えり

○葦竹

民家の裏よりむろ一弘法大師當國にありたものなり。農公典へとある者の家より葦竹は能望なり。たまりは此者極に貧乏なる者よりなり。我山の竹は悉くあるひて杖にたり。以て云是よりふ思ふや幸に生る竹皆葦竹といふは山にあり。こふ竹毀て畑となりぬれぬ竹も生る。大師又と同お千代

と云ふ者の方より竹は能望なり。能望にふらふ葦竹はた。時大師自身の服は取出しむ。一首の袂は実付て冷ぬ是を小所持りて是はたの依主小乞や多小持果て文永と見えり。とて是等なり

○志那比竹

をまぐさの竹子かきこし

七の月のはや切て乾く



や一箇厚房を二箇七の月にはや切て乾く。此は用をたすなり。

おまぐさ

増小針沼

小針村の南西小川より東西經云丁斗南斗斗斗
系川其外都下小川に多落溜り四時水波流たり東へ流るの
川小流る

○慈雲山貞觀寺

長久寺末一老し小見村の入口往還のふ有

寺領十石市米平觀世音堂本堂の西あり佛像暖釈迦也

山門の内右より左へ唐銅佛阿弥陀堂同左より右へ山門外堂則力士
二王所出也

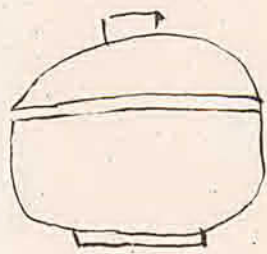
岩窟あり其の後には觀音堂の腹より入る方八尺四面悉く青文板

石より墨むま中へ入りて壁に大横三尺四方八尺四面形あり石

よりなる石地盤あり

岩窟より出

古器踏圖



圖の如く
唐銅のて
作る

増縁起曰夫当山ハ古賢船師乃梵刹觀音薩埵の靈應の灵切し

曩時豐御食炊屋姫の天皇推古乃馭宇小當り根改と宮太子の

金糸小應りく大仁鞍作鳥居東國の海道修飾良田を膏腴

の地に開き水汲み治免險隘を平填らる事あり此地小あり不測の

靈地有感一自手觀者施無畏の像彫刻伽藍を結構し

是地島豆を盛盛あり一時堂坊規制嚴淨なり其小堂双

の柱觀あり一と名無き小興廢起伏の時小係つて本堂漸く形

のて殘りたりと云ふとも柱傾き無き形なり而露小朽荒蕪

の地し無んとして爰に人五十八代順徳院御宇建保年中瀧

憲阿闍と云ふ人々も靈場の顯應より驚き歎て是地再興し

且夕本堂の瑜迦修飾他疏と東西小唱歩する事凡二十四回して

漸旧觀不復一歟后龍憲阿南利仁治云壬寅年八月順世其則
是於南山中興の開祖といふなり已其三百餘歳の星霜を経て密
弘通の地とせり又元龜年中足利家の為魯薄の災小延て池魚
旱ふかの時寺舎僅坊一宇も残るを鳥有とせりといふ每本
寺施無畏の尊像、灰燼を辟て老松の枝より生じ城程にて
是を辨じ得たり是城少一の堂舎成嘗てありて後天正十
八年石田の黨の兵水より入て大小荒廢あり此城の星小古の
形も失ひて今慶長九年十月觀音の由來

東照神君の 台聴小堂一寺鎮石の御朱印并境内竹木乱防
の御刺れ給ひぬ爰に山へ色増増 昔よりある爰に境の昔
より丘壇より寛永の頃迄ありてお階御築へといふお中より

の石龍城堀江寺一 大十八人を入容一 其形石城畧に櫃の如し
僅古何の爲に作りし事跡なきを傳傳之又碑の傳はれなく故
内小石地盤城あり一 窟の地を云い其不思議の古壇あり

増法華坊 觀音の西四五十歩小なり民家あり處に小谷
蓮華寺の旧地し三十番神の石祠小あり所より元龜年中々
の地小標中寺地ふ事

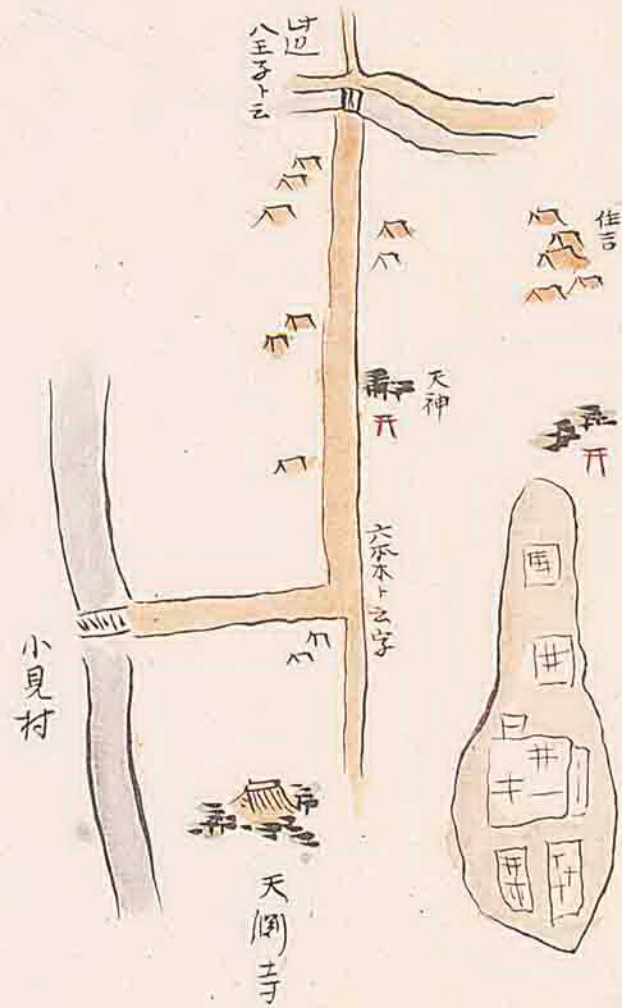
○荒木天神

荒木村の中程あり村の山を神とし例祭を夕暮日

なりさう祭儀をそ振部よりし業あり 此善治 同町の東に
有り荒木四郎右善北条家の居る万石城鎮是所城の跡あり所より
小土より了橋上の面影あり沿の川小あり所あり 里人其地を神と
増今も古沼より矢の根銃丸ありい鎖の鎖物に木柱七枚あり

里人の云四郎右善成田の氏族なりと思ふ所なり
 成田城を築き居住せしとき根々成田家没落の後兵小
 没せし者なりは其考ふ所なり成田は荒木氏おぼしむ即ち苗
 の人又其の城の没落をいつの頃なるか天正の龍城山頭が市田より
 如く要害を築き居りて天文中成田赤井の黨と合戦の時
 六の月より陳延の頃より同黨より城のよりなり荒木城のよりなり
 なる一程東國に戦記にも未見なりは城出りての兵器蓋我
 い一時の物なり且時軍器成田記より上野國吉柳の城より赤井山
 城より勝元より近き所より強大なり同国板倉飯の北大島を合戦なり
 是れ其の城を幕下とすなり其城集めて近國に押領天文五年
 八月上旬の境利根川に押領し住吉の東に陣居居（忍城）を攻めんとす

中務少輔右善城よりき里餘押出荒木川にあり小當に橋引
 落し小當の堤を橋とす備を去て有るなり折角一霖初より
 敵川を渡りし所より有るなり所小云云下界



○聖徳山天満寺 旧村の南より洞家清善寺末
 大子堂 門内向少河より大子立像十六歳之時同延内陣横額聖徳太子の四
 目作

沿のうちより龍燈城をくぐりお霊驗ありける事いふ可
是より月より四郎信教の思ひを祈り則ち奇を用基と根津
四天王の靈地を摸し山を聖徳山と号し寺は天海寺と名く四
に四天王住吉八王子等の社を觀請し中央に御堂并山門四郎
神の御建立し早夫より以来東皇太子と崇めたる天正年小
崎より荒木也善小至り遠境小窓る今日龍燈城名付て也善
沿と云嶋城太子嶋といふ今小嶺と沿の由より龍燈出現し彼宮
より至る所外其驗ありたり古今同しと云ふも星霜稍移り
諸君悉く風破りも小隅き既ち衰廢し及小至り至る寛文十
一年卯年恩の城主河原豊後守御原の御位に秋廣き像而高の慈
光除きしなり者也

○新御田

○増 伯内五丁日光街道の駅より川俣市岡原三丁館林二里行田
二里行茶肆旅店商家農家軒並並東西未討て巷は狭

○與木大明神

石の中程東側小河

むり一清水より幣小神より書付杉の木二本流れ流る此處より依り
是城あり何の神ありと云ふに於て未とけぬ

○増 概多小款く寄木あり河内より引て考ふ備わ江は砂子田
寄木大明神河海あり河原義家御片負任宗任御征伐の為島國
下向の時此所より島にあり寄木の社を拜せんとておの事曆法
尋ねたまひし漁夫曰當社日女を尊橋姫と祭る云なり橋姫に
海中より身を授けたまひし時其母碎て死し小宮の此所より流れ

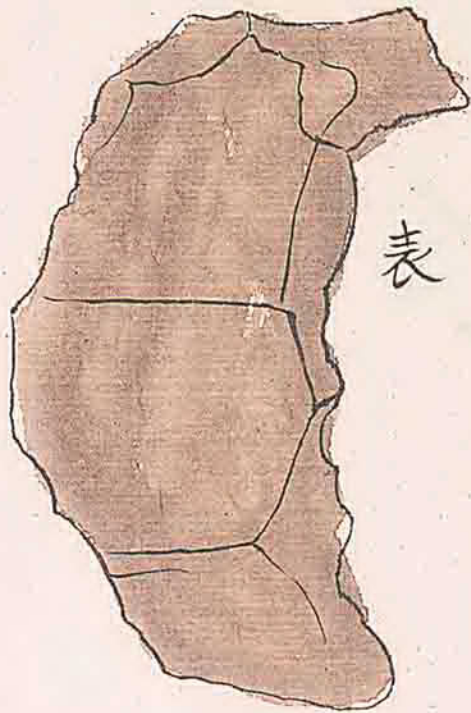
家の人は是れ因て身家の思ひ終り且そのやまにあうし其
 顔ひぬ是れ今も孝感の致を要にして此危難を遁脱する物と
 して減小する僕が貴く其龍の甲成ふとけしむに主家小當免
 一ツに僕の家よりて孝感の証とありとも也

附てつふ先より書中僕役中川鉄砲手此難を免ひし
 証書一ツを因に之と書しけり此の書を見れば人々
 なるなり

○川俣山岡所

増別所のお利根川堤の上より廿八鉄砲等証改り半箱根荒井の
 六ツ

大龍之甲



表



裏

三尺八寸

増補忌名所圖会卷之四

洞李 香齋 著

岩崎 長谷増補

城西之方

○久伊豆明神

大宮口御門の外より別當所より山峯雲寺

脩強なり当社の花表往古に今の沼尻に在るの東に一社ありしや

そは 神君御八四の節めりて人等小亀昇り居たりしと云

て古瑞照つくと申感悦まされしと云や是より早く龜行山と称

はとのや

○増大宮御門といふも此久伊豆河その名ありて荒井田町の山神

○慶祐橋

持田組屋敷の裏大宮口より持田村行側の川に

○係る搦鉢つふ一徳丈門下慶祐退轉の跡おれ名ありと抄聞え
大雄山正覺寺 持田村往還のたにあり浄土宗鴻巣

膳飼寺より属し智恩院あり寺領三十石御朱印し阿部氏世々の位
牌所あり古碑門内に百文永の年号あり當城は中丸の地より出ると云

元一〇〇〇
文永十一年戊戌月八日

○増寺傳曰往古真言の梵刹あり久敷荒廢小及び城成田氏也
開基は鎌倉光明寺世一世智教上人招て長く安ん居りむ是
當寺の中興開祖と云後松山下野守忠吉侯菩提所と傳ふ
梅貞大童子殿墓碑寺内ふあり 忠吉侯 嫡男

○持田山阿弥陀寺 正覺寺より一丁半右ふあり時宗御憐

清淨光寺未明り開基は二世持田上人なり

○増諏訪明神 阿弥陀寺の裏より一丁計あり此城の御社也
何れと云今神社に祭れる物也

○増釼明神 往還の右にあり祭神素盞島尊

○増常樂山長禪寺 釼明神の隣あり新井真言同色寶

藏寺未し當寺は法印祐慶阿闍梨と云聖の御基と云ゆに
墓碑あり寛平の年号刻あり

〆〆
法印祐慶當寺開基
寛平三年歲
三月二十一日

増 寶壽山也藏院宮持寺

同往還の石あり新義真言

小牟村成身院未なり金治二年延應二年程決いの古碑中塔あり

増 星川の末

熊谷（新通）北川新谷子に少し悲の雨れし

川原石忽ち及び熊谷の石と寺庭中にある雷の池より湧き出る

星川星川の池といふなり此川急初夏の頃より當多しと夜

景殊より一々よりこれぞ熊谷持とてあつてひつり此

千町田の早苗は波打ちちゆつてわたりしを人の袖で傳家の

まゝと散れ来るわづるの光も涼しく見ゆる哉うちもけつて

安女より将おちてふもささくさくする

増 常慶院

持田村四尾村に於ける石より河家成龍

淵寺未なり寺傳曰成田親泰の師なり龍淵寺四世以成初名と受

戒より尼と有り新々念仏三昧の外他事皆し程以列を招て尼

よりしよりへる持乞小師より老若小及たれに主徒弟表仙

永正永正三五年屋丘卒とて一寺新建立なりと大田山常

慶院より開山則養仙和尚より屋丘の墓碑印塔に有り

永正十三子天
常慶院殿三定正公尼大師
五月廿六日

増 深田

常慶院より東方四尾口市門外四尾村辺の田舎に有り

天正後小野村伊豫守此邑に備四尾には押寄といふも左右深田

よりして進退自由なり此中の山勢に教へしおやされしと有り今程

田圃の土中より古物鉄物等散見せしむるあり

増 檜上城跡

四尾村より云のこ島地こつた外延と
し地の方より本と云のこ島地なること

増 永井領の石標

村の入口の巷より

是より北長井領

あるふおきりい永井の店といふ後人誤てかくあるなり

○ 与昌菴

村の入口より廿地延池上といふや茶師堂あり
堂より俗名の茶師を媛茶師といふ成田氏長息の達也と婦人の諸
形別して願ひといふ諸願の為なりぬのきけい此は茶師の
ぬきたる物堂内より元きり近年何故かの藩中加藤素なる者の娘
生じぬといふと父母の歎き大方ぬけに茶師より祈誓しぬに

日ぬきとて眼明なりなりとて都てはりと限りて形をぬき云

○ 無量壽山泉蔵院

新井真言下恩遍慈院末村の市程右

小河村

増 市といふ舎も飯けいといふ今に脚小菴あり天正の政

兵野村伊豫守妻の御持なりといふ

○ 久伊豆明神雷電宮

おの西よりふりり省社文治四

年亥四月成田中郎成景達よりて至る古に社しと社家諸より
居り社より白梅多く初春殊に雲景の神主 青木主殿

○ 岩蔵明神

池より村西寄り右にあり疫神の祭例三月十五日

神主 茂木丹後

増 成田御合より村といふ成田式部太郎助島田館の地は東光寺の邊

なりハ幡大神等御祭より度よりいふ山海の内村なる所

多小水張汲する所り忽感慈にけりし事なり

随神つ 馬居と本社 鐘堂随神つ 馬居 石に下達社地へ合而向

別當伊豆山久見寺本社の右あり 新井直言一衆院の属に 雷電社

鎮二十石御朱印書せり 雷降の字れ出た雷社焉者懐表

多難をくつふ常々寺財解集に

○太平山龍満寺 村の北河より洞谷越あや常郡慈眼寺

未寺鎮百石御朱印

増 本寺僧坊悉く仰り寂冥たる矣抑と云

御宮寺の東倚 權現水山宮の側あり 龍満寺の西

六寸沼ともいふ此満は龍棲をり岩に 下馬札惣つあ 山制札下馬札の

禁制 龍満寺

一軍勢甲し人等並妨狼藉之事

一放火之事

一對地下人百姓非分の役あり事

右し條々を傳止記述犯者名

速可原為科名也

天正十八年四月

御朱印

奇記曰抑當寺の南是れ竜清願と云う何國の地と云ふは

又終る家七を以て時の人羅漢和尚と稱し成田の城主成田即と云

人或夜の夢小白き蓮花を現る怪して町あり城下のをとり

此寺に水より有る事なり 岩小城の築き寺の阿弥陀をり

例の樹下小入の至僧も小田子運持く然然とく座居
 たり其体更ハ凡僧よりを流ハ立歸り叩くと云城主のいふを
 急と云ハ来る也云云云云と有る也云云急き何故とて彼僧
 を拒くと云ハ毎教に業引せしむるをも何ぞ云ふなり云云漸
 にして其ぬ是故是より愛ハ凡僧ありき云云其新田先僧れ
 く今より故地よりして水く國分清平寺教豐院元生利益が祈
 禱もあぐんやたれ云云此處は素よりて来る也云云有るも小僧
 欣然とくく受命せり云云成田の大淵を渡る云云と云ハ其即云
 げするもあつと云ハ其彼淵古より毒蛇潜指し人被害にる云
 云云其外小清淨の地も有る云云其智恵ふふまふ云云と云
 云云いやと云ハ其淵貪道に縁の地也其彼下押置れと云て

聖賢の道不空を修せざる時、即ち又曰く淵に漂はるる舟なりと
 して容易に漕む能はずといふ。其子姪形としてその
 彼れより進み出る所、人故多しといふ。波濤にまぎれ、水と混ぜ
 る事を知るも、亦たそれ等しく昧の中、中有ゆるぐ座あり
 といふ。人々皆これを以て寢も知らず急ぎ立帰るといふ。即ち此の如
 きに、五郎奇異のおもしろい物語、備へて佛菩薩の化身と
 なうて加護され、永劫二百萬の地獄家内——太白山龍
 洞寺と稱す僧を和庵清順和尚と稱し、愛小居り足利
 法向愈々事なく惜せんとも大洲悉くお代とけり——應永十
 八年七月七日の夜なり。満願寺にお居たりする凡そ四年なりと云
 ふことも客省におある事なりと云う。その後二代雄雲に傳道法師

天正八年四月

俗塵出得此修證了
後却多子住破勞了

難く上京後蒙り得て関東印
 國の初太ふしかへる天下泰平
 當家必ふの者おとす印感懐まりて財奇蹟百石の常来印奉
 門をさ像のし物来奉りて而龜次日記にたあるなり
 今考ふの

什宝を市制れ
 又寺の東小井河
 油君山楊枝山に
 今世多る

權視水と喝（其時亡唐）
地小宮初と建と
神靈哉崇也

金如意扇

陳鈴

三尺奇書之竹

價百貫

印子香爐二

蜀紅紗衣

神君而膳具

唐益板
四三板後
官上

○醫王山家光寺

村の西より

洞家龍浦寺東塔彫物等

了賞廉躬 本尊業師 如來 如一天
喜日 作計

喜一日作

增

相傳于世
菜師

岡部六弥太の依頼し正印を印するに牛馬を記す

按此

増 光明山一乗院無量壽寺 村の西倚田圃の方より新築

真言高野山金剛院属を多中寺なり

涅槃像掛物 横二間半 堂三間 彩色を以て
筆を以てし 二幅あり

寺傳云大同元年の草創し数家の田録に逢て堂塔をうんと不

傳にも又池を築きてと云ふ事却て秋庭と云ふ

増 成田山恭藏院 村の中程右より 洞家龍淵寺未成田記田當る

一乗内通 equal 恭藏の(井)具し柳成田恭藏は七恭の三男と云ふ事

愛子ありて成業兄氏長恭親のより有しと云ふ成業は年家督の

駿動をせり父也恭は落髪して嫡子氏長(跡)成業より家督

當年の落髪成業より中より但父を我刑部長恭の夫人と計り恭

親は成業より有るものなり 今家督のみ附此にありと云ふ

恐る切腹を叔父刑部助已に承り襲ふと云ふ事枯一時は事と云ふ

七恭親新樹の無量壽より多中寺恭藏は村の東より風は吹く事

く有る田邊成業より有るに同十年秋母の旭世を去りて後より

堂なりと云ふ事なり佛門に在り龍淵寺の光明菴親當國

騎西の壽昌寺に隠居し有る事なり清和 是師

と云ふ事なり成田の富小西方寺と云

時宗の一寺なり今佛像聖牌も亦寂しこれ石標塔の舊

蔚の力よりして只親の棲る所なり 成業は母遠きなり成思

兄の氏長より請ふ事なり則梵字成業より成田山恭藏院と改め菴

成田山より高龍淵寺の末流と云ふ念佛之味ありて清りなり

今後尚あり 寺より世寺よりなり 云云

増成田落鴈

成田千畝接東西 鴈陣横斜落遠室春
去秋未留此地年 應飽稻果豐

日野前大納言資時卿

いづは〜成田の面影落る鴈のこの山の峯我城跡に

八景所謂 黒髪山晴嵐 筑波山夕照 利根川帰帆

熊谷晚鐘 長井夜雨 泉山秋月 成田落鴈 赤城暮雪

増宮田村 宮田太郎佐々里(旧御の地) 東鑑建久元年

云云 廿七番 宮田太郎云 其番 廳南太郎藤九郎成田七郎云

増肥塚村 肥塚太郎光七旧蹟あり 肥塚代々熊谷の旗下のり

熊谷家系小見立書

古碑 肥塚某の地と云ふあり

石厚三寸斗 長三八寸

設我得佛十萬四生至信樂欲生
我國乃至十念若不生者不取正覺
康元丁巳三月

〓 応安八年三月七日 遵義禪門

横三尺二寸斗 長四尺五寸斗

○熊谷宿 馬より西の方小寄る路程二里餘(東)四里丁深谷(西)三

十町熊谷以御道実の由跡あり

増廣の市津を町の中程北側より 往還より 是れ世裏の田圃に延び

権現のありて 通実の館跡と云ふ所 中江道の中にも頗る都會の

地ふくく南家新張年(四方の貨客上輻輳)販賣茶肆貨
食多し人群集る所あり家あり南家小多富山林の家
あり日々に柴薪取寄りてあり交易成りて武田馬場の神祠に中
程北側あり千枚神社に同側あり鎮座神々あり千枚座云
蓮多法師の墓碑に本社の外北側小寂然なり是より西石原の地
北の方の巷に妻沼の路あり二里餘に及ぶ宿内田所新築町
横町等の小石あり二七九日布致立

○熊谷山大慈院報恩寺 本町へりつ所北側あり洞多龍満ち
本山門樓へ本堂庫利相備りて中庭あり惣門横額惣管神具阿
部正職公筆なり

○増寺傳曰往昔に淨土の梵刹ありて今に世に轉りて洞窟とあり

蓮生法師の本像に往昔尚寺小あり故なりて彼寺(堂)と云ふ

○高樹明神 町の中程北側あり本神社例祭六月廿五日

神樂殿本社の前あり本社の四方小配座 鳥居 本社と入口瑞垣

神主 福江喜太夫

○増祭神高皇產靈尊延喜式神名帳に武藏國大里郡高樹神社

小座ありて一殿ありて有る然に神社にけりといひて建勝
縁起曰武藏國大里郡熊谷高樹神社に延喜の神名帳小見傳
はるそ崇めたりて幾千年来りていひていふと荒すといはる
事既ふ久遠なりといふ本縁に知る者なく熊谷通官の神あり
卿氏の名傳にけりといふ事新しといふ福江喜太夫傳にけり
と新しといふ事新しといふ事新しといふ事新しといふ事新し

跡地を館振祿里の青洲より安山神徳の所なる地と時あり
也り又寛文十年庚戌秋更著始より里人の云ふ、いふ事や大
世社の傍に小橋の木の葉落して言せ、大木是より一圍二丈五尺斗
より枝に立あがるも心をあぐる有地成さる事云々斗ふ室なる穴
有り、其口七寸許、その内いと狭く、その洞穴の如く、そのうち清水涌
出て湧くるなり。若し外湧涌急なれば此の水は用ひ詰の涙を治
まると必感徳の効が治る事に人知らず、近頃因つて目こむせやく
集り治るとはこれ水で洗へば此病は癒すなり殊に怪しく聞
し、幸か否かありしか、七月の同辰夜を得幸りと此人を外秘傳する
と治し寢た事もかたじけなくあり、これこそ方治のかねなき事か
秘なることを集り治る人秘傳しく秘手人よわび宜とめられ

なるを肩とて、江是神軍に永勝し雲水が受くるハ行（空元より）
涌出せる流も漸くのゆるれへ備ふる井華の跡みよる海汲て彼
其水が加（普施）ゆるも病が治する不願なりを後、神徳の著け
作ら功徳が求むるを立る輩、靈力を得て實はける人のまじ散る
鵲眼摩牙樹垂たる繡鳥哉そそくとふふ知つてそそくの情
以てわの家へ儀、賑を神徳の恵給たりとみぬ地り思城の領由に
しと今の國老は四品侍従兼豊後守阿蘇朝臣忠秋とある所見へ
其家督播磨守正能と云ふ心持流力増たられうなほちも新々ぬめ
せし神徳も流す——人々畏れ敬ふ神書心成るはる者の中にも
世社高皇產靈尊の跡なら流つるといふ稿子考（傳々と抄寫
にも安方侶の記さる古事記高木神高皇產靈神の別神といふ是に

其母の家に倭訓おのふ例もられざる有の由一柳高皇產靈神
と申に天照大神と相並て、百万神の長としてたゞせたまへ誠ふん
ことなりしに密にやもさしこそ神祇の殿に安んずるべきなり
守り國家の鎮守なり神祇の靈威の諸國に光被る東路の
常事なり勸導ももつてあはれなりとも賢く然る今世天
水も天照河に餘波のあはれ臥臥不測の理地きりたれども中
ももつて神と母と並先生の神の徳に水の中にも有なりといふ
はに信あり神の徳の如くさるる莫くへた氏傳ふ民神の主
なりといふをいふ推し時久敷幽暗し神徳の今威験を凡そ
もこの教ひ出さるふ候へりかく隠く大なるに堂々因信を傳へる
なりと仰るは是れなり神國を保護し城主の壽域を向く

村民永く恩澤ふ潤例式の祭なるに人々事候希所しむ應
忍拾遺之永而作之倭語雖非余所知不辭其懇請聊叙傳聞
之趣而已

寛文十年庚戌之夏

弘文院學士

当社什器 天國寶刀長三尺七寸五分 刀一振廣國銘有 上指矢一筋根あり住國

天國刀記曰 聞昔文武天皇朝天國為治上始製太刀極精妙無
敵儔者以故世未有得具真者苟能得之則天下莫不稱美余族
太祖曾村山次郎入道清久嘗城武州八王子北居焉家世藏天國
寶刀傳審秘焉清久没子清武嗣清武攝羽生城數十年威名
赫然一旦為冠兵所圍不免而卒軍終敗績清武有二子長
失其名次曰清昌及城之陷也長兄收家譜圖書清昌藏其太刀

而後嗣長兄住尾州求之不得昌獨家居不仕隱態谷駅昌生
清春春生清次乃余父也娶石井氏生余捨而為僧親戚皆云村
山之祀其可絕乎父曰昔者武功為烈及遭世變無復可云凡有
為事皆如夢幻不如令我子續佛氏以報祖先竟許余出家奉
法既而及石井氏卒遂乃舉家敬施親里躬自剃髮号止庵主
安清已絕世嗣矣故以其天國寶刀奉納于 高樹大明神祠矣君
城景俊守阿部正武廣聞之令使者取刀召刀鑑本阿彌詮視本阿弥
稱真而無贋於是 阿部廣為謂國害矣命工洒削盛于害
匣還納 神祠永為神器去今社司寄害刀舊記乞余筆而
証之因寫其原由更附家譜傳以昭悠久也
寬延三庚午中秋吉日

奉教前往永平後董大衆見隱洛押大山妙玄白龍教手書時年十二

增 白龍和尚傳

白龍ハ村山清次の次子ハ高母ハ石井氏也幼ク

テ僧トナリ永平正山和尚の弟子トナリテ白龍ト号シ龍通教ハ
歸リテ父母省勸以母子幼クテ寺ニ居ルヲおそれニ甘旨誠
結シ又清次龍ト云テ回家出テ僧トナリテ法修メテ親ト所法
の為ニ才力精テ 道跡ニ素食シテ 天下ニ名知ルヨリ流リテ流人
ナリ訓ニハ是ヨリ心ヲ禪理ニカシメテ急ニ修メテ 遍江湖ニ遊
履シテ普徳ニ遍索シ得法ハ後越ノ永平寺ニ傳リ又席越洛ハ
の源光ト董加ハ大衆トシ移住シテ新ハ洛西ニ妙玄寺ヲ創シテ不
增 千秋神社 高樹社の西にあり 祭神未考至て古社のより此指
出小田照寺といふなり 雄野山千秋院と号し 小戸村ハ千秋庄と云

白河

○直實古銘趾

増 臥たり北三斗熊野権現の社有る處也と云

傳ふ者多し戸田ハ村ハ東行寺と云寺有り此實の城地あり
云り今佐谷田村のふ子ハ丁と云處ありと云東行寺と云ハ行
ハ東行院あり云ハ近世の文書ハ久下東行寺東行院ハ云あり
さて此寺ハ直光の白河より直實直光は是限ハ云あり

○東鑑

治承六年六月五日甲辰熊谷ニ即直實者匪勵朝夕恪勤
之忠去治承四年追討佐竹冠者之時殊施勲功依令感其武勇
給武藏國舊領等停止直光之押領可領掌之由被仰下而直
實此間在國今日令參上賜件下文云
又下武藏國大里郡熊谷ニ即直實所定補所領之事

右件所且先祖相傳也而久下權頭直光押領事停止以直實
為地頭之職成畢具故何者佐汰毛四郎常陸國奥郡花園山
楢籠目鎌倉令責御時其日御合戰直實勝萬人前懸一陣
懸壞一人當千頭高名具勸賞件熊谷卿之地頭職
成畢子孫永代不可有他妨故下百姓等且兼知敢不可
違矣

治承六年五月丙日

増 熊谷塘

驛の南裏にあり 佐古熊谷堤として長と街を

是形ハ佐谷ハテ久下の河よりまじ堤のよ成儀事ありと云

長蛇塘と云ハ 一の長蛇の形の名あり

芭蕉翁碑

新宿の舟屋より北行ハ町屋のふれ遠ハ今亦出

壇をうり 日長 鐘、旭寺

○蓮山熊谷寺

駒の西倚、中戸改めて右にあり

浄土宗智恩院末寺、領三十石御朱印

蓮生法師本像

昭段に安置 十王堂、阿弥陀堂 右本堂の右にあり

弥三左門福荷

門内の右にあり 本社拝殿、賢人談、和漢の書、歌、草花等の彫物あり 萬葉集

増

近世男女皆云く小児の生弱物、世の福荷、小仕女に似たり

有りて生年限短く見且見の面、髪を縛、置て嘗て叱る事

あり、久大方に病なり、成長せざる、病と云、僧祈て奴

福荷と云、詣人、晴雨、云々

仁宮

門内、入る方に、奉り、鎮座

中門、惣門

塔中

上品院、上生院

蓮生法師廟所

本町の後あり

縁起曰、熊谷二郎直実、

桓武天皇の後、胤平直方の子也、若冠の時、関

東に趣き、久下直光の聲と、形、成長し、随ひ武勇著く、都侍實

門の合戦、悪源太義平、十歳、武者の膽と、呼ぶ、石橋山の戦

に、臥木隠後の恩賞として、萬石賜の、後附、幕府大將頼朝公より

拜領、其外、勤功の感状、廿通、賜る、其後、永承三年甲辰二月七日

根、少、若の合戦、無官太吏、敦盛討て、首を、給り、若子直実と、戦州、て

久夫ひ、時の悲し、競、教養、の父母の歎、あり、ひやり、今、常の墓、所、に

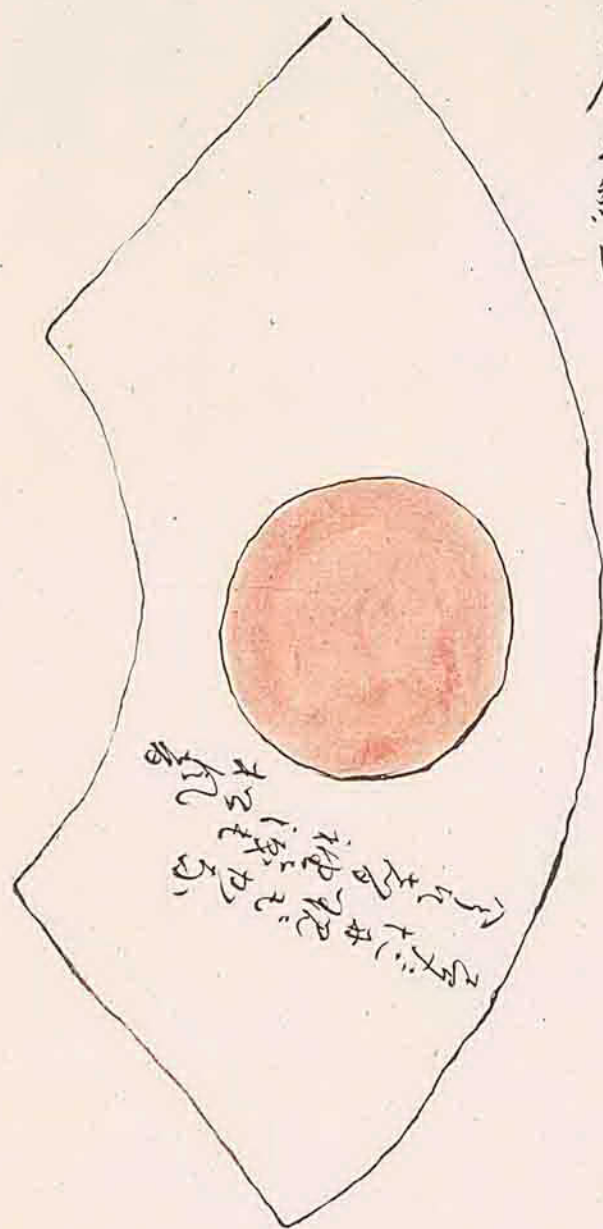
情、則、其、善、提、揚、吊、ひ、身、弓、馬、の家、中、主、目、後、世、の、思、ひ、も、思、ひ、は、是、より

後、心の思ひ、ある、に、其、後、建久三年の冬、久下権以直光と、鎌倉、に、於て、武能

未、久下、直光、の、嫡、子、争、論、一、途、途、に、終、る、を、い、ひ、其、所、を、湯、山、に、馳、入、り

事、都、より、法、然、と、の、御、才、子、と、なり、二、心、腹、を、念、佛、の、行者、と、や、め、れ、り

直實
軍扇之縮圖



母衣之縮圖

南無阿彌陀佛
南無阿彌陀佛
南無阿彌陀佛
南無阿彌陀佛
南無阿彌陀佛
南無阿彌陀佛
南無阿彌陀佛
南無阿彌陀佛
南無阿彌陀佛
南無阿彌陀佛

能谷次郎直實母夜也
為法名法力諸罪滅
此果號盡早



仁三癸亥年
四月八日 源空

寸 一 尺 一

旗之縮圖

三足八寸

利劍即是弥旒

熊谷次郎直實旗也

南無阿彌陀佛

一聲耳稔念罪即除

爲源平面向書久
源光二

一尺二寸

至子孫，能令可令存者

一先祖相傳所領室堵御新形也
并保元、年以來至建弘年中
軍忠御賊狀廿一有之

一對主君不可成逆儀并武直
可守吏

一上人御自筆御理書再
迎接愛賜羅可成信也
右卷中條之外依其身照量
可思見諸者也仍置通狀如件

建弘六年二月九日 蓮生 記

有令尋門給事于時直實申云此事梃原平三景時引
級直光之間兼日申入道理之由欲仍今直實預下問者也
御成如直光定可開眉其上者理運文書無要祿不左右綺
未終卷調度文書等投入御臺中記座猶不堪分怒於西侍自
取力除髮咄詞言殿乃御侍偕登利波則走出南門不及收宅還
電將軍眾殊令驚給或說指西馳駕若趣京都方欺云云
則馳遣雜色等於相摸伊豆所々并宮根走湯山等遮直實
前途可止直世儀之由被仰遣于御家人及衆徒等之中云
又云同十二月廿九日今日走湯山專先妨歎歲末券數以其次申
云直實法師上法事也有偏執羊僧諷調思止畢但左右不
可還參營中整可隱居武州之由申之云々

又云建久五年七月十日熊谷二即直實法師自京都參向辭往
日之武道求來世之佛緣以降偏繫心於西刹終晦跡於東山今度
將軍家御在京之間依有所存不參追凌千程之嶮難泣述丑内
蓄懷仍召御前先申狀離職欣求淨土旨趣次奉談無法用
意干戈故實等身今雖法財心猶並真俗聞者莫不感
歎今日則下向武藏國云々頻雖被令留之給稱後日可
參之由退出云

又云承元二年熊谷二即直實入道以九月十四日未尅可為終焉
期由相觸之間至當日結緣道俗圍繞被東山草菴時尅者
衣袈裟昇禮盤端座合掌唱高聲念佛執終兼睡無
病氣云云

梅もふち記ふふに多岐以て終に中実都が去る爰小曲の
尾屑して没せし撫りし東瀛小考ふふに終考ふし
いふ人の還ふつし古衣尾の肘丈も通るうきき道徳原
増享保四己亥首夏忍領北河原邑照岩より八景詩歌之由

題熊谷晚鐘

中御門前宰相宣頭卿

勇士猶存一古墳

細懷白旆擁三軍

黄昏過客為追予

驚却鐘聲馬上聞

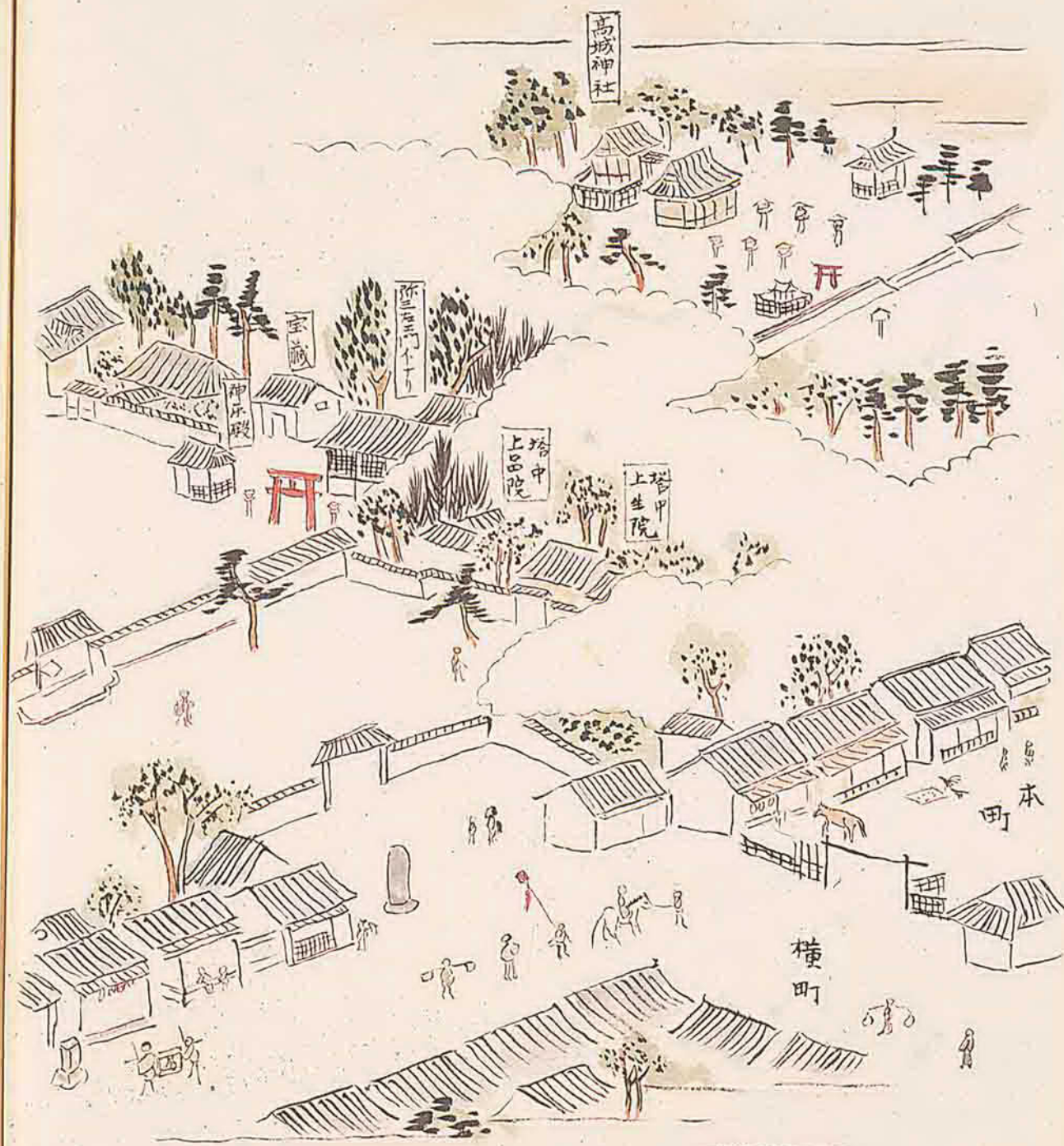
同十八甲寅仲春八條中將藤原隆英朝臣重祢より泉山八景和歌の
却舊題改正云々右古文書より

熊谷晚鐘

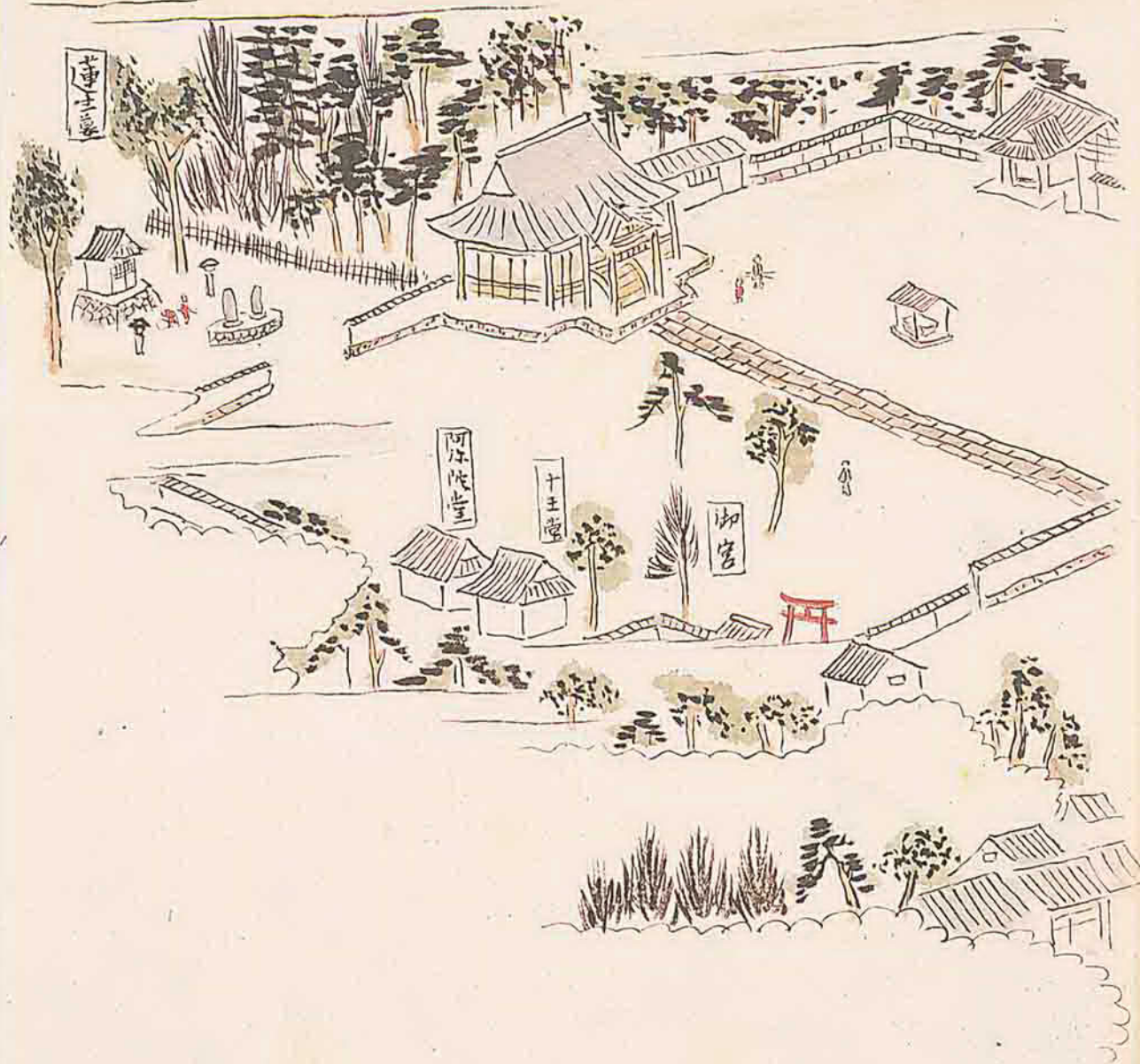
高野前權大納言藤原保光卿

鐘の音にゆきむの夕暮をいれむしむ袖も濡る

蓮生山
熊谷寺
高樹明神



勇士猶存一古墳
緬懷白旆擁三軍
黃昏過客多追吊
驚却鐘聲馬上聞
中門前亭相宣顯卿



蓮生法師



積少成多 新美真云一條院末之

長不知聖德
太子作

多門天堂

門の向小高き
地乾堂
何処に

清泉

庭中より一戸を閉ぢて潜魚水料をく見ゆ底に
石ありて水涌出四時増減を多し於星川の水よとふ

傳ふに、鑑活支蓮生法師の本像、當寺の藏の中におり、寺

要聘也。以下子供等本像を保持し、そのやうな場合の融

寺(聖塔)と我

増 梅の華を木像の源由詳に記す如く法恩寺にあり也

又高奇如何 佛像等如何 他送多否 有

此は母熊谷正阿の妻の蓮生の像歟。心寺の古き証とす。

いふは

熊谷櫻

當寺門内ハ數樹有り 花の派ハ一時の美弱態ニ

増 お傳ふ当寺に往昔石恩の城主和泉守家臣秋山雅樂外、用
基より庵あり、其後世に随ひ荒廢し及び所由歟の竹井某が
多きの再建云と

増 止心庵 当寺に傳ふ石恩の城主和泉守家臣秋山雅樂外、用
基より庵あり、其後世に随ひ荒廢し及び所由歟の竹井某が
多きの再建云と

止心庵主安清は、始村山次郎清次と稱して武列熊谷の人なり。武列は、子
城主村山次郎一と清次の裔なり。父は清春といふ。子清昌の時より至る
熊谷の里正なる家代に、豪富に清次石井氏に娶ひて、白紙の庵を
清次宛ふ石井清昌に譲り、永平山に松崗を築きて、万法帰一の法を
拈提する。○玉叶の一日有る。○何て疑團始て水餅、心は清を
之より依り、自安清を以て名と、次又覺玄律師に就く梵網法を學ひ
戒律に精進する。○教あり、安清嘗て撃劍射圃を善に、持戒の極人

是村岡と毎ふ答ふる。夏あり、石井氏流し、下流遂に家財を親戚に
施し、敬、教恩の古徹律師に授け、剃髪し、僧と號する。止心庵清と
稱し、盧山邑の星河に夢とて関を閉ち、道を以て偶ふ。○通ある
る阿れ、自ら名を流し、(論ひ)く樂む人、是は星河と云人、と云元禄中、申
年、夫坐常の如く、盧山無物の偈を唱へ、快然とて、寂に壽五十六
遺命、○随ふ火化し、下流葬にといふ。○
自り、主なる、安と云人、まれに疑く、とある、
之、又、此の流し、持する、と云

○星川 宿の南、東に流れて、下、西の沼に入る

○村岡の溪 横河より、南に下り、荒川に合ひ、松山乃、お本田

高山、山、川、の、山、泉、なり

増 お傳ふ、古の鎌倉街道なりと、今、松山、川、越、後、に、府、下、乃、相、別、の

大山参詣の足跡と依の軍中より城の街にのりて来り

○目録道

石原町中程に御小巻河り二里余といふ

増城和泉守撫上城趾

石原村の西倚より今

侯の御小巻

ある多岐を九とふかしの方城二に九曲に成りて今城家の
家臣の子孫當村に歟なり

城家傳

城伊庵

織部

伊庵

和泉守

武田信濃守晴信に属し鉄炮大將勤む駿州沼津に住む後信

州に移る武田家滅亡の後天正十年

神君に随ひたり石原村に

住し多七村に更に

城家傳に云ふも母田に傳へし一に石原村
にふし傳へる古文の中なり

増和泉守墓碑

字坪井といふ地東漸寺といふ小あり

今世に建し物といふ

増田川

佐谷田村の邊より涌出する下流上等のわき流り

なる後瀬川

の上流より川元に當り城家の元來り寛永中今の東竹院の西に築
けり田川古野川といふ所へ今の如く小流なり惣へ此村に多く

水沙を吹出せる小池ありなり佐谷石上寺の池に類するなり

増熊久橋

佐谷田と熊谷の地境は還の小川に架る石橋なり

ふといふ(直實と直光と)堀を築いて樹し橋なりといふ

東鑑

建久三年壬子十一月九日熊谷次郎直實與久下權守

直光於御前邊一談是武藏國熊谷久下境相論之矣云云

増八町之渡口

佐谷田村より千鳥村へ渡り初冬より橋

成係夏に海濱し佐谷田字に八丁の地收れたり云り千鳥の濱と云

千鳥村に成田の氏千鳥美作守の旧地なり云り今も昔見ゆと云

増補忍名所圖會卷之四終

増補忍名所圖會附録

岩崎 長谷著

増 領の名考の条羽生領、井戸集とある、非なり、本乃伊豆守也

増 御名の考、岡のふと、とふ、香新翁の説、付とふのし、今思ふ

岡のふの、碑、少記を以て考ふる、ふと、と、思ふと、草字の似たるを

て誤りともや、何れ、此の御とふ、証も、何れ、さきと、福のたうり、なき、何れ

増 御本丸 諏訪旧地、持田邑、沼尻と書、誤、沼尻、中里村、北枝、今思ふ

増 鐘掛松 此城の、諏訪曲輪の、堀、より、天正の、龍城、本図、より

物、形、より、
彼鐘、阿部、辰白、川城、移さる

古鐘銘
銘字、誤、多く、一、と、誤、(一、を、誤、ふ、と、き
もの、形、より、さう、と、誤、を、誤、さ、う、と、誤、

治鑄、梵鐘、一枚

施無畏寺

右當寺者畏祖爲關東奉
右次廬家御菩提所令建
立也而此鐘梁上公忽梁
堅雖倍破之就殿即求得
如元令治鑄仍銘曰

今此鐘簾

新古青銅

即爲土子

方命全之

後奄叶度

清音振響

血明警夢

外內九城

憲柙聖裏

文武百碎

各抽臣忠

招提長同

政埋普通

曉夕致勤

久扇梵風

願主正六位上行左衛門尉藤原道敏

敬白

大工

遠江守朝臣

延慶式己酉十一月九日

增標髻堀

地所詳なり天正龜城の時城南要害清田所なり
氏女侍奉の例にて堀をたらし標髻を以て指圖なり故

名と云ふなり

增鎌田屋鋪

崎玉村より保元より鎌田兵部正清東鑑より鎌田
次郎長周行後鎌田圖書左衛門尉信俊鎌田より即入道西阿一より西傳等より
なり成田家より鎌田某より河内四地より知れり

增若王山

同村より岩窟より太刀等の物出せしなり
なり此より考ふなり成田記云云永禄年中上杉謙信と長春と和睦の時質

とて末男若王丸上河既橋の城一午嶋義作舟にお添へ遣置く後
鎌倉に於て長巻と又不和なる依て既橋の人質若王丸を盗出せし
城中の兵も追えれ利根川にて暫くしなく主従三人潜越んと川にお
若王丸川中にて甲斐船に溺死す義作舟其信小堀小抱奉りて
忍上洛りし云々若王丸を葬りて塚を人々より村衆に授けし
若王丸既橋より返りての後お近々義作舟を改修棄門よりて成田を建
立せしなり
増陣場 濱柳におりて天守し攻め石田之城を陣取あり陣地の
松とて有しと天守の石松とて也

増門井村

当村に散在する古文書と云む氏家なり

当村に成田臣栗原大寺あり采地あり今稲苗藩

一田五町九反六十歩拾七反七町五十又門井に田
一畠五町あるなり部なるなり又 同所
右部拾ノ文と不考なり信とや何れ作

天正十七年乙丑

十一月廿日 氏長五

栗原大寺の及

一田五町三反五拾ノ文 門井に田以上
右拾貫ノ所あり又云々何れ作

天正十七年己丑

十二月廿日 氏長五

栗原大寺の及

増久下村系

市田 和名抄大里郡市田 以知

東鑑元久二年六月二十八日以武藏国之下御被寄進勝長壽院

弥勒堂領云云

増池身村子安明神之傳由

神像一寸八分金銅の天女嬰兒小乳

會いおふ形あり土人傳く神功后皇と云ふ神玉子安の玉質水晶の如く
経る八分一寸五分石七寸四分一寸色濃墨をくろく形平小金粉
と置けるが如き物なり昔時淡野七政思惟家當時社人神像并二宝を
臺に入らず小壇に標し柏を植て去るも社に兵火に焚くこと元禄
中極悪なる柏奮來と略して夜毎小光を放つ土人を驚れ其を以て
此の者なり一人強勝の者ありて彼柏を伐小根をり又光あらず十年して
於城下又も小一の靈証にきく信じて鉄板にたく當くこと靈火にや毀ぬ

中を見らる神像ありと流し即社を再建して安喜氏婦人子育の屋敷
祈る小願あり天の中社僧并神像并二宝を以て携へて去る夜能るの
旅亭に宿りる小奇怪ありて神像并二宝を以て携へて方へたる如
依て再今の如き鎮座ありてありなり

増南河魚村

今村重光の系業今村某の家小物る古之君成田氏也然り

世に内意し流し被承け方にお
初る皆依るるを配む指ノ文あり系
以長面金つて銀如き也仍女作

天正四年

三月九日



其村源氏なり

増 行田と云号古より有り証

東鑑廿 行田兵衛尉駕小太郎駕四郎太郎云云

増 長野村 長野之即ウ住一旧地と云武蔵記当如秩父重忠の弟

長野之即重清ウ住一里許り地形云

東鑑廿 駕三郎ハ重清也云云 同甲 永野次郎太郎思小太郎云云

増 小見村 小見左衛門家時旧地時と云小見代考

増 白旗明神 白川村より天文年中上松謙信上列より攻来

時如高より軍勢松樹と云今其所と馬場と云備前如小旗一流

新説と云土人足利石樵入土中埋免松本松樹並ぬ今に至る迄白旗明

神と崇奉すると云とも松樹をウリより神祠系記時

増 若小玉村 わくたまと云若小玉の所より又若小玉と讀也

行田古例あり當村ハ若小玉小次郎直家ウ居住の地時と云今其旧地ハ建礼

と云今其殿山と云あり松樹小旗 武蔵國若小玉此一黨ハ外圍の紋を

付云杯軍の紋小見え云

増 三千坊沼 前谷村より古大沼時と云今田圃と云社

古世の沼ハ鐘沈と有一武蔵田龍満寺の和尚加藏主此鐘沈法カ沈て

取上寺ハ持新其供一知と鐘一重撫と云 鐘重撫ハ此在より古村 云云

行中後小川ハ係り松樹也

龍満寺ハ存し今其常陸筑波山より云

忍名所圖會跋

府縣之志自古皆有之建業以來
智城爲侯國殆二百余年未聞
有志者哉

公移封干城二十年所一旦而此
其人也乃見其書實是文教之所
化可謂盛焉而洞李翁所錄漏從

亦多矣覽者憾焉今岩崎長谷
編搜究索補其遺遂成全書也
亦大焉予借覽之次召感於中國
醉書之後云唐子季秋如公
老漢璋識

松崖書

りあき

るけゆのこころいりいれのみあき
とり本すれ石あすれらきいけ
めほりんねをこるけふにかりて
あつうはてしなくけきあきあき
とのいけすてくへりいれふり
かさりいれあきあきいれ
能ありあき世のいれを思ふく
あきあきいれいれいれ
あきあきいれいれいれ



